

博多 120

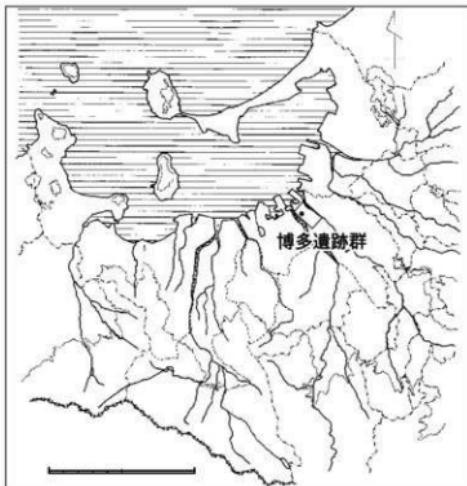
—博多遺跡群第160次調査報告—

2008

福岡市教育委員会

博多 120

—博多遺跡群第160次調査報告—



遺跡略号 HKT-160

調査番号 0601

2008

福岡市教育委員会



1. 博多遺跡群第160次調査北半第2面 全景（南から）



2. 博多遺跡群第160次調査北半第4面 全景（南から）



1. 天目碗(90) 2. 天目碗高台墨書(90) 3. 四耳壺(46) 4. 人形(242) 5. 染付皿見込(207)
6. 染付皿外側(207) 7. SC-4 軒平・軒丸瓦(159・217) 8. 石・土製品(左上から237・236・239・
230 左下から243・238・244・235・234・239)

序

福岡市には多くの文化財が分布しており、本市では文化財の保護、活用に努めております。しかし本市では各種の開発事業も多く、やむを得ず失われる文化財については記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は共同住宅建設に先立って調査された博多遺跡群第160次調査の報告であります。発掘調査の結果、中世から近世を中心とした遺構・遺物が見つかりました。博多遺跡群は弥生時代以来2000年以上も連續と続いた遺跡であり、また、中世には日本屈指の「都市」だったことで著名でありますが、まだまだ性格不明の部分が多くあります。本調査は博多遺跡群の北側砂丘「息浜」の西側入り江部分にあたります。綱場町のこの街区は周辺に比べて遺跡調査例が少なく、その成果は博多遺跡群の研究において重要な意義をもっておりです。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた、株式会社リファレンスをはじめとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が、2006年4月3日～7月4日にかけて行った博多遺跡群第160次調査の発掘調査報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時に遺構を示す記号Sを付して検出順にS-1,S-2,のように通し番号をつけた。本文ではこの番号に遺構の性格を示すアルファベットをSのあとに付しSK-1のように記述する。
3. 本書で使用する方位は真北である。
4. 本書で使用した遺構・遺物実測図は福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課 赤坂亨・山崎賀代子が作成し、製図は赤坂・上方高弘・石水久美子が行った。
5. 本書で使用した写真は、赤坂・上方高弘が撮影した。
6. 本書の執筆・編集は赤坂が行った。また陶磁器の整理には上方の協力を頂いた。
7. 陶磁器・瓦器の分類および時期比定には以下の文献を参照した。
山本信夫 2000「太宰府条坊跡XV～陶磁器分類編一」(太宰府市教育委員会)
横田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
中島恒次郎 1995「II 各地の土器様相 12. 九州北部」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
8. 報告書抄録は裏表紙に記載した。
9. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので活用されたい。
10. 出土鉄および鉄・銅製品の保存処理、X線による鉄貨名解説は福岡市埋蔵文化財センターに依頼した。
11. 本書第1図は田上勇一郎 2006「発掘調査からみた中世都市博多」『市史研究 ふくおか』創刊号の第1図をトレース・改変して作成した。

遺跡調査番号	0601		遺跡略号	HKT-160	
地　　番	福岡市博多区網場町 144・145 番		分布地図番号	千代博多 48	
開　発　面　積	296.52m ²	調査対象面積	162.00m ²	調査面積	134.1m ²

本文目次

I.はじめに	
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	4
III. 調査の記録	
1. 概要	4
2. 層序	6
3. 遺構・遺物	
1.第1面	10
2.第2面	11
3.第3面	15
4.第4面	15
5.その他出土遺物	16
IV. 小結	19

挿図目次

第1図	博多遺跡群調査地点位置図 (1/7,500)	2
第2図	博多遺跡群第160次調査位置図 (1/1,000)	3
第3図	調査区北半西壁土層図 (1/40)	5
第4図	博多遺跡群第160次調査 第1面全体図 (1/80)	7
第5図	SK-1・SK-9・SK-12・SK-13・SX-3・SX-4・SX-5 (1/40)	8
第6図	SK-18・SK-19・SK-20・SK-35・SK-36・SX-2・SX-32・SX-33・P-6・P-98 (1/40)	9
第7図	博多遺跡群第160次調査 第2面全体図 (1/80)	12
第8図	博多遺跡群第160次調査 第3面全体図 (1/80)	13
第9図	SX-10・SX-14・SX-16・SD-17・SK-34 (1/40)	14
第10図	博多遺跡群第160次調査 第4面全体図 (1/80)	17
第11図	SE-25・SK-24・SK-26 (1/40)	18
第12図	SK-23・SK-27・SK-29・SK-30 (1/40)	19
第13図	SK-1・4 SX-2・5・6 出土遺物 (1/3・1/4)	20
第14図	SK-12・13・15・18 SX-8・10・11・14 出土遺物 (1/3・1/4)	21
第15図	SE-25・26 SK-20・24・27・29・30・35 SX-22・31・32 出土遺物 (1/3)	22
第16図	遺構外出土遺物その1 (1/3)	24
第17図	遺構外出土遺物その2 (1/3)	25
第18図	遺構外出土遺物その3 (1/3)	26
第19図	遺構外出土遺物その4 (1/3)	27
第20図	遺構外出土遺物その5 (1/3)	28
第21図	石製品・骨製品・土製品・製鉄関連遺物 (1/3)	29

表 目 次

第1表 遺構出土遺物観察表	23
第2表 出土銭貨観察表	28
第3表 遺構外出土遺物観察表その1	30
第4表 遺構外出土遺物観察表その2	31
第5表 遺構外出土遺物観察表その3	32

卷頭図版目次

卷頭図版 1	1. 博多遺跡群第160次調査北半第2面 全景（南から） 2. 博多遺跡群第160次調査北半第4面 全景（南から）
卷頭図版 2	1. 天目碗（90） 2. 天目碗高台墨書き（90） 3. 四耳壺（46） 4. 人形（242） 5. 染付皿見込（207） 6. 染付皿外側（207） 7. SC-4 軒平・軒丸瓦（159・217） 8. 石・土製品（左上から237・236・239・230 左下から243・238・244・235・234・239）

図版目次

PL 1	1. 博多遺跡群第160次調査北半第3面 全景（南から） 2. 博多遺跡群第160次調査北半砂丘面 全景（南から）
PL 2	1. 博多遺跡群第160次調査南半第2面 全景（東から） 2. 博多遺跡群第160次調査南半最下層 全景（南から）
PL 3	1. SX-3・4・5・6（北から） 2. SX-3（北から） 3. SX-5（西から）
PL 4	1. SX-3・7（東から） 2. SX-6（西から）
PL 5	1. SX-2（北から） 2. SK-12（北から） 3. SK-13（北から）
PL 6	1. SX-14（北から） 2. SX-14（西から） 3. SX-14下溝（西から）
PL 7	1. SX-10（西から） 2. SX-16（北から） 3. SK-19ベルト（南から）
PL 8	1. SK-20（北から） 2. SK-23（東から） 3. SK-24（西から）
PL 9	1. SE-25・26（西から） 2. SK-27（西から） 3. SK-30（南東から）
PL10	1. SX-32・33（北東から） 2. SX-34（南西から） 3. 南半最下層石列（西から）

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

平成 17 年 9 月 30 日付で株式会社リファレンスより福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課宛に福岡市博多区綱場町 144・145 番の物件に関して、共同住宅建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号 17-2-628）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群（分布地図番号 48 千代博多 0121 遺跡略号 HKT）に含まれている地点であり、この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上、平成 17 年 10 月 20 日に申請地内の試掘調査を行い、現地表面下 150cm 前後で整地層と、井戸と思われる遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成 18 年度に発掘調査、平成 19 年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお調査対象としたのは開発面積 296.52m² のうち、共同建築建物部分の 162.00m² である。

調査期間は平成 18 年 4 月 3 日から 7 月 4 日までである（調査番号 0601）。調査面積は 134.1m²、遺物はコンテナ 95 箱分出土している。また、整理作業と報告書の刊行は 2007 年度に行った。

現地での発掘調査にあたっては株式会社リファレンスをはじめとする関係の皆様から発掘調査について御理解いただきと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して深い感謝の意を表します。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

事業主体 株式会社リファレンス

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課

平成 18 年度

調査総括 山口謙治（埋蔵文化財第一課長）

山崎龍雄（埋蔵文化財第一課調査係長）

調査庶務 文化財管理課 鈴木由喜

調査担当 埋蔵文化財第一課調査係 赤坂亨

調査作業 水田ミヨ子 酒井康恵 草場恵子 村山巳代子 西村寿美枝 安東昌信 許斐拓生
永田とみ子 上野照明 藤村正勝 定直康浩 福嶋大 高橋界 在郷正治

平成 19 年度

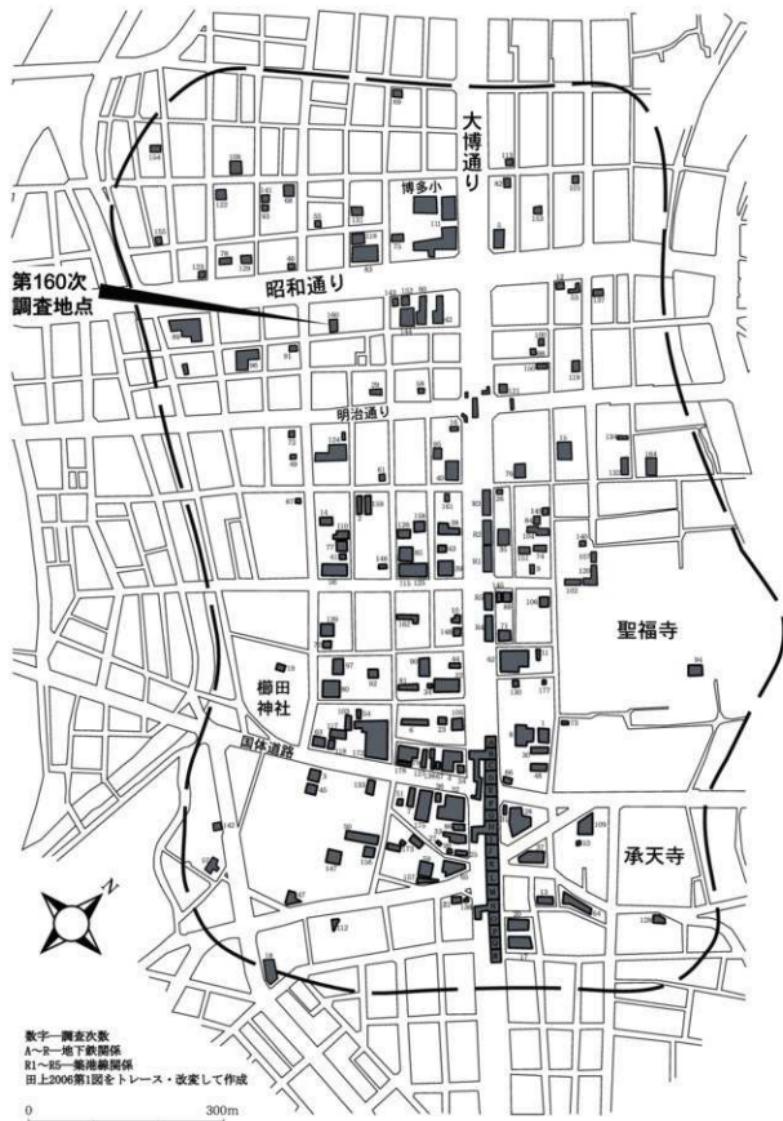
総括 山口謙治（埋蔵文化財第一課長）

米倉秀紀（埋蔵文化財第一課調査係長）

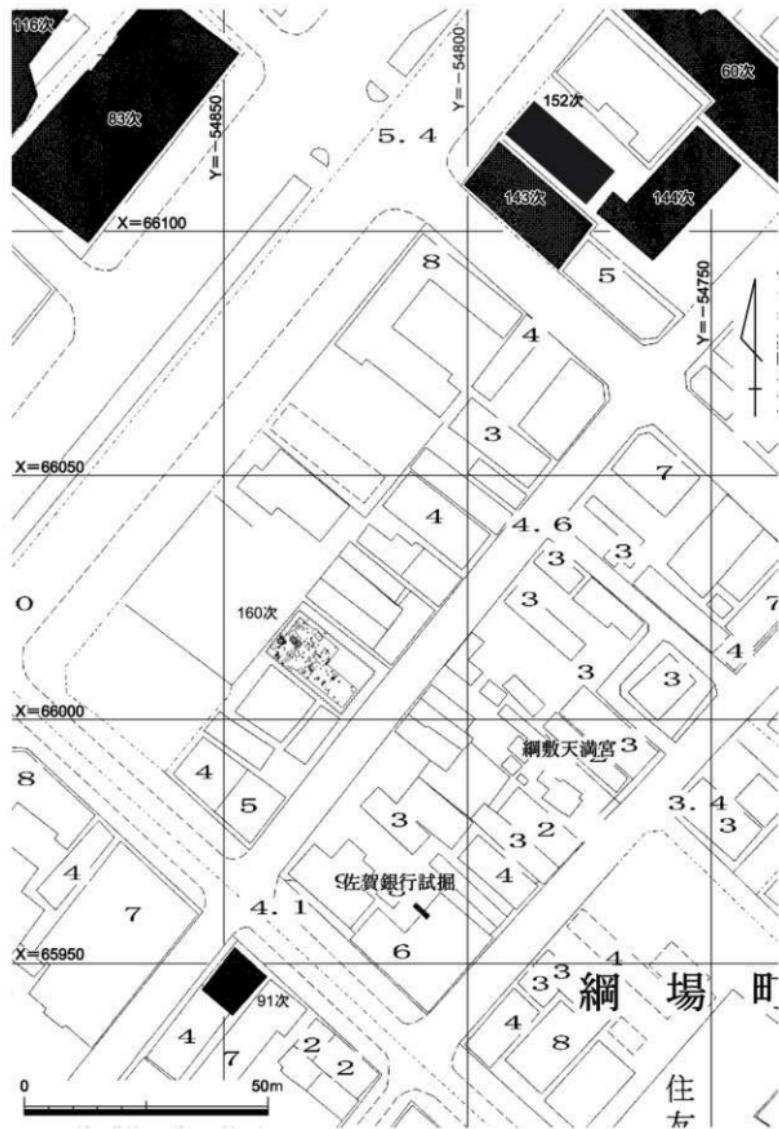
庶務 文化財管理課 鈴木由喜

整理担当 福岡市博物館学芸課 赤坂亨

整理作業 石木久美子 小田敬子



第1図 博多遺跡群調査地点位置図 (1/7,500)



第2図 博多遺跡群第160次調査位置図(1/1,000)

II. 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は現在の博多川と石堂川の間の河口部に位置する。弥生時代から現代まで継続する都市遺跡である。博多遺跡群は三列の砂丘によって形成され、博多遺跡群第160次調査地点はその最も海寄りの「息浜」と呼ばれる砂丘の南側に位置し、博多浜と息浜の間の入り江に向かって南へ緩やかに傾斜している地点である。(第1図)この街区での調査事例はないが、南方約50mの佐賀銀行試掘調査では16世紀の陶磁器一括埋納が確認されている。また南方70mの第91次調査では15世紀以降の遺物、遺構が確認されている。また綱場町の由来となった綱敷天満宮が調査地点の南西約50mの地点に所在している。(第2図)綱場町内では北西約100mの地点で第60・143・144・152次調査が行われている。60次では平安時代以降、143次では宝町時代以降、144次では平安時代末以降の遺構が確認されている。

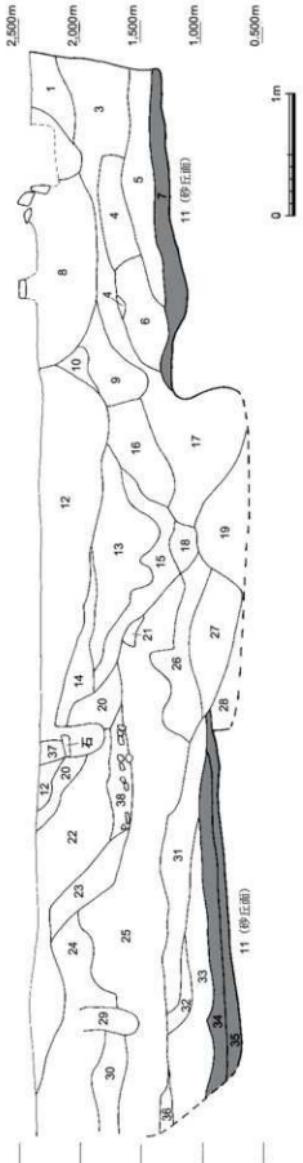
III. 調査の記録

1. 概要

平成18年4月3日に機材搬入を行った。調査面積が狭いため、調査区を北半と南半に分け、土砂を反転して調査を行った。まず北半より調査に着手。周囲の建物への影響を考え、鋼矢板から約1mの幅で土手を残し、その中を調査した。遺構は、まず石組遺構SX-3を検出した標高約2.5mの面を第1面とし、石敷遺構SX-14を検出した標高約2.2mの面を第2面、SX-14を完全に外しきった標高約2.0mを第3面、包含層の黒色系砂質土を完全に除いた後の面を第4面とし、順次手作業で掘り下げながら調査を行った。第4面で褐色砂層となり、ここが基盤となる砂丘面かと思われたが、褐色砂の下に黒褐色の炭混じりの層が南に傾斜するように全面に広がり、その下が基盤の砂層となることが確認できた。6月7日に北半の調査が終了。重機による南半の表土すき取りを行い。南半の調査に着手した。南半は行程と休憩場所の確保の都合上、約半分の面積の調査となった。南半は礎石の出る高さを第一面(北半第1面)とし、以下標高約1.6mを第2面(北半整合無し)、標高約1.2mを第3面(北半第4面)と設定した。同じ調査内だったが遺構の検出状況が異なり、北半で検出した遺構の続きを南半で検出できない場合があった。南半調査時は梅雨の時期に重なり、また湧水も多かったために、作業の進捗が遅れたが、7月3日に南半の調査を終え、7月4日に機材を撤収し調査を終了した。

北半第1面では石組遺構、土坑と多くの礎石を検出した。第2面では「く」の字に曲がる石敷遺構を検出した。第3面では井戸、土坑・ビットを、第4面では土坑・ビットを検出した。第2~4面からは土師器、白磁、青磁が出土している。第4面下の黒褐色砂質土中からは瓦器片が多く出土した。南半では第2面で土坑とビット、第3面(北半第4面)でビットと石列を確認した。この石列以南は主に上の面から掘り込まれたビットがまばらに確認されるのみであり、この石列が遺構の南限となる可能性がある。遺物はパンケース95箱分出土した。

座標は国土座標を用いた。座標は光波測定器を用い、基準点T34を始点・基15後視点とする結合トラバースにより調査区内へ座標移動を行った。なお基準点T34・基15の国土座標は平成4年3月に西技測量設計株式会社の行った博多地区遺跡基準点測量委託の測量成果に基づいている。



調査区北半西壁土壌図 (1/40)		標号	色調・土質	粘性	性状	標号	色調・土質	粘性	性状
57	1	1	褐色	あり	しまり	20	褐色	なし	しまり
	2	黒灰褐色土	あり	なし	粘土多く含む	21	褐色砂	なし	なし
	3	黒褐色土	ややあり	なし	粘土多く含む	22	黒褐色砂質土	あり	ややあり
	4	褐色	なし	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	23	黒灰褐色砂質土	あり	ややあり
	5	黒褐色	なし	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	24	黒褐色砂質土	あり	ややあり
	6	褐色～黒褐色砂質土	なし	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	25	黒褐色砂質土	あり	ややあり
	7	黒褐色砂	なし	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	26	黒褐色砂質土	なし	なし
	8	黒灰褐色土	あり	なし	炭換土含む	27	黒灰褐色砂質土	ややあり	18層と層するが他の流れが異なる
	9	褐色砂質土	ややあり	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	28	黒灰褐色砂	なし	なし
	10	褐色砂質土	あり	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	29	黒褐色砂質土	あり	ややあり
	11	明褐色砂	なし	なし		30	黒褐色砂質土	なし	なし
	12	黒褐色砂質土	ややあり	なし		31	暗褐色色砂	なし	ややあり
	13	黒褐色的質土	ややあり	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	32	褐色砂質土	ややあり	なし
	14	褐色砂	なし	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	33	褐色砂	なし	なし
	15	暗褐色砂質土	なし	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	34	暗褐色砂	なし	なし
	16	黒褐色～褐色砂	なし	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	35	褐色～黒褐色砂	なし	なし
	17	黒褐色砂質土	ややあり	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	36	灰色砂	ややあり	なし
	18	褐色砂好	なし	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	37	黒褐色砂質土	あり	あり
	19	褐色砂	ややあり	なし	表面が風化突出。炭少量混じる	38	黒褐色砂質土	あり	ややあり

第3図

調査区北半西壁土壌図 (1/40)

2. 層序

層序は調査区北半の西壁で確認した。重機による表土すき取りは地表下150cm（標高約2.500m）まで行い、それ以下は人力によって掘削を行った。本調査区の層序は①基盤砂丘層②暗褐色砂③黒色系砂質土④表土を含む擾乱層の4つに大きく分層できる。堆積の順は①→②→③→④である。

①基盤砂丘層

基盤の砂丘層は西壁の北側で標高1.300m、南側で標高0.650m確認された。北半全体の調査状況では、砂丘はほぼ現在の街区の方向に沿って、北西から南東方向に緩やかに傾斜していることが明らかになった。調査区内での砂丘の最高点は1.700mであった（第10図）。この傾斜は、本調査地点が博多遺跡群の息浜と呼ばれる砂丘列の南西部にあたり、博多浜と息浜の間の入り江に向かって砂丘が緩やかに傾斜している場所のためである。この砂丘層は南半では水性堆積の暗い砂のまぎった互層になる。湧水のため、調査区南半西壁では砂丘層を確認できなかった。

②暗褐色砂層

基盤砂丘層の傾斜の上に堆積している。7・34・35層が該当する（第3図網掛け）。調査の中心である③の掘削が終了した段階では、③と②との色調土質が明確に異なっていたため、この層を地山の砂丘面と捉えていた。しかし、②中から遺物、特に③出土遺物よりも古い瓦器などが出土地したため、全体を下げたところ①が検出された。②を下げる基盤砂丘面を出し、遺構検出を行ったが遺構は検出されなかった（PL1-2）。従ってこの層は遺構面ではなく、砂丘の上方から流れてきた遺物包含層と考える。本調査地点の南東側では、本調査地点では確認できなかった12世紀以前の遺構が存在する可能性がある。

③黒褐色系砂質土

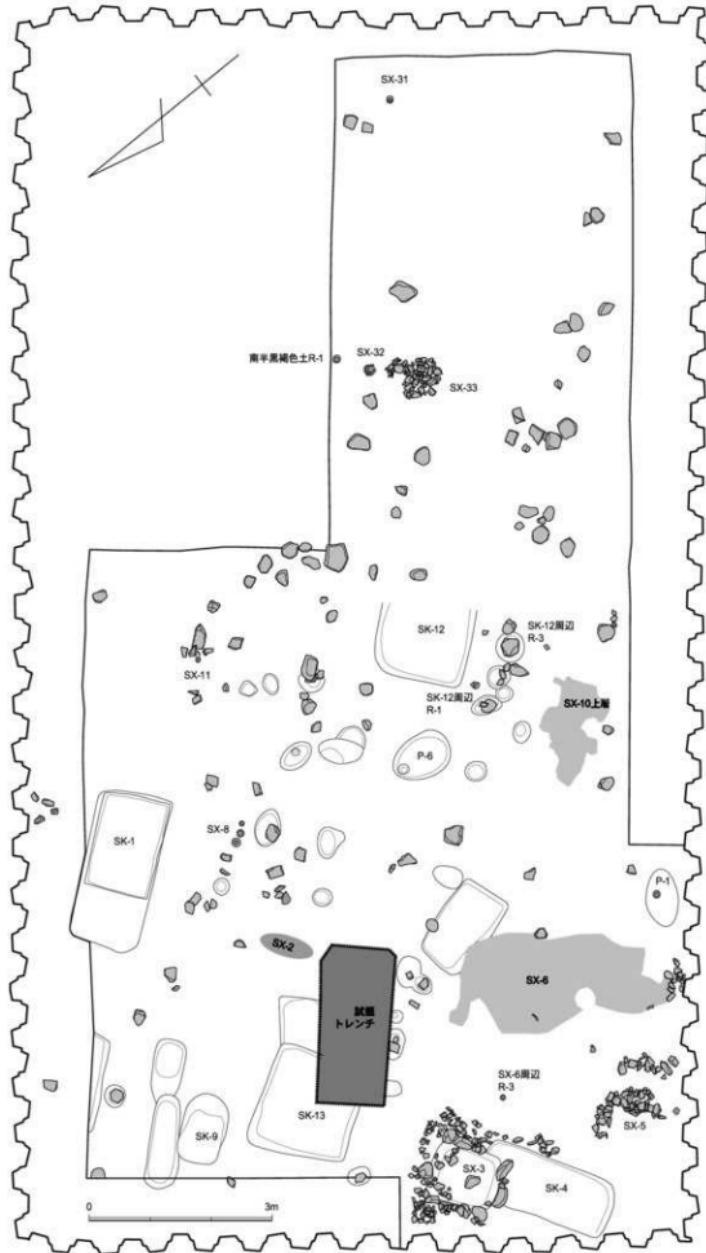
本調査地点の中心となった土層である。基盤砂丘の傾きに沿って堆積した層と、ほぼ水平に堆積した層とに二分できる。前者が4・5・16・31・32・33層であり、褐色砂など砂丘の砂の再堆積した層を含む。後者は1～3・6・8～15・17～30・36～38層であり、黒色系砂質土のみで形成される。両者の境界線付近の標高約1.700m付近が遺構調査第4面である。石敷遺構を確認した標高約2.500mを第1面とした。1面と4面との間、標高約2.200mを第2面、標高約2.000mを第3面としたが、第3図にみるようにこの③は多くの遺構が切り合っている上に、地山も遺構覆土も黒色であるため、遺構の面の認定が難しく、第2・第3面の設定は恣意的である。また一部④から掘りこまれた遺構もあり、④と③との境も層位的に明確ではない。時期は13世紀～14世紀であり、一部近世の遺構も含む。

④擾乱層（表土を含む）

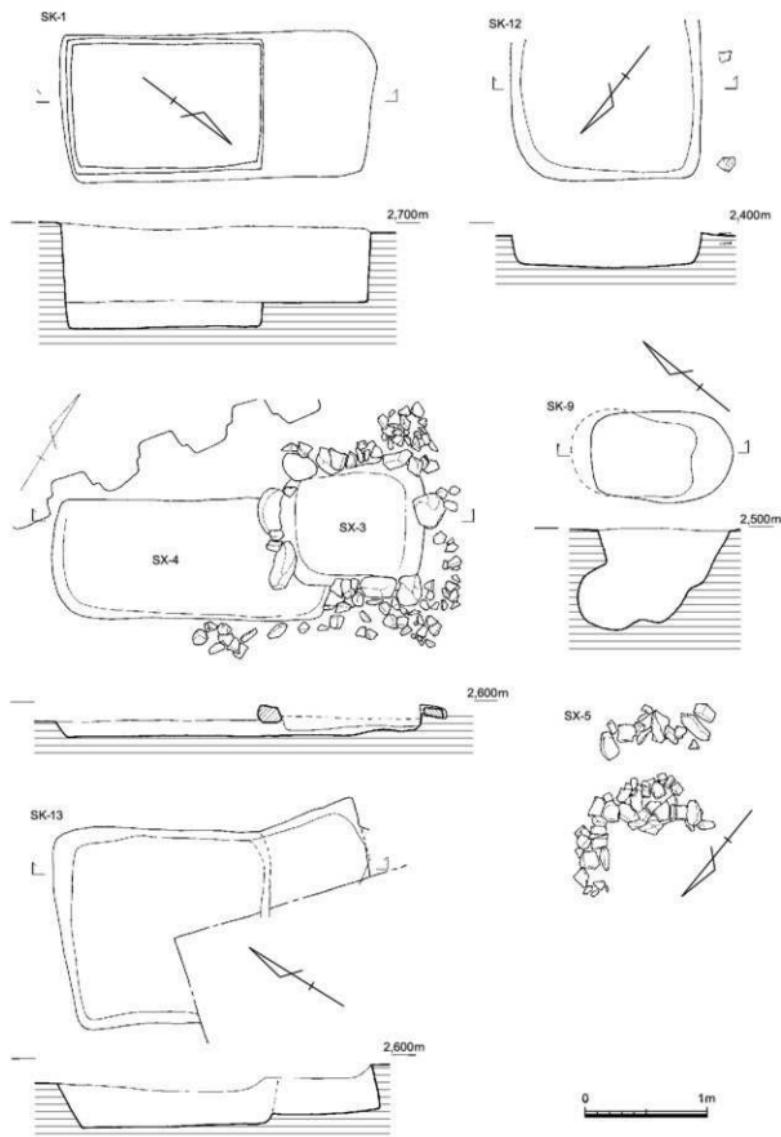
地表面から150cm下までの標高約4.000m～2.500mの層である。試掘時および表土すきとり時には遺構面を確認できなかったが、土層から判断すると、第1面や第2面の遺構は2.500mより上から掘り込まれているものもあり、視認できなかったが、この層の下の方には遺構面があったと考えられる。時期は近世から現代である。

3. 遺構と遺物

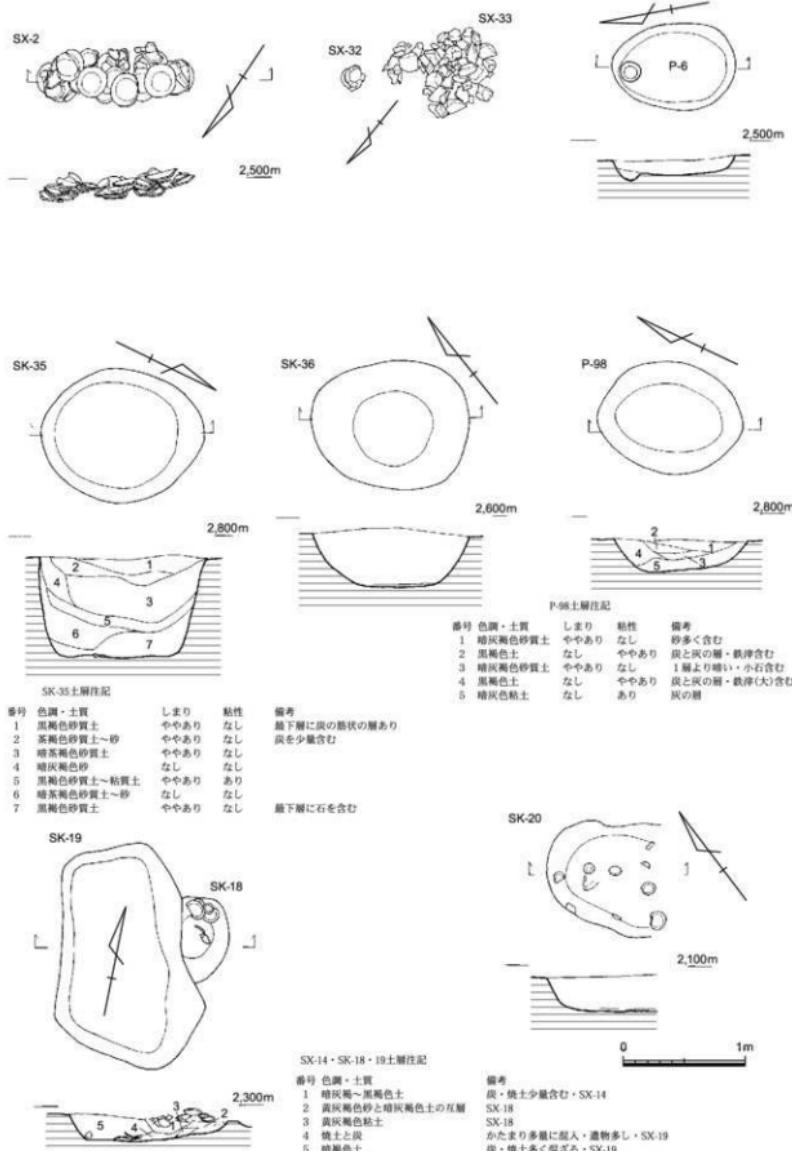
第1面から第4面までの遺構面毎に遺構および出土遺物の記述を行う。各面での記述順は遺構種別順（アルファベット順）に行う。なお調査時点では調査区北半を4面、南半を3面として調査をおこなったが、本書では北半の面を基準として報告する。南半第1面は北半第1面に、南半第3面は北半第4面に対応する。南半第2面は遺構がなく、北半とも対応しないため除外した。



第4図 博多遺跡群第160次調査 第1面全体図 (1/80)



第5図 SK-1・SK-9・SK-12・SK-13・SX-3・SX-4・SX-5 (1/40)



第6図 SK-18・SK-19・SK-20・SK-35・SK-36・SX-2・SX-32・SX-33・P-6・P-98 (1/40)

1. 第1面

土坑 SK-1 (第5図)

調査区北半北壁付近で検出した。2.5m × 1.2m の平面長方形を呈する。この長方形のなかに深さが60cmの部分と80cmの部分がある。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面もほぼ垂直である。壁面付近は若干覆土とは色調が異なり、土を素堀したものではなく木枠がはめられていたと考えられる。遺構の性格を伺わせる遺物は発掘されなかった。貯蔵穴であろうか。遺物は土師器皿（1～4）が出土した。時期は14世紀以降である。

土坑 SK-9 (第5図)

調査区北半北隅で検出した。0.8m × 1.2m の平面隅丸長方形を呈し、深さ0.8mを測る。遺構覆土は炭を少量含む暗灰褐色粘質土である。発掘の結果内部で大きくオーバーハングする形状になったが、2つの遺構が切り合っていた可能性が高い。図化可能な遺物は出土しなかった。時期は不明。

土坑 SK-12 (第5図)

調査区北半南側で検出した。1.6m × 1.2m 以上の平面長方形を呈し、深さ0.3mを測る。底面はほぼ水平である。遺構覆土は地山より若干明るい暗灰褐色砂質土である。南半調査時に残りの部分の検出を行ったが、発見できなかった。遺物は無釉陶器・甕（44）が出土した。時期は不明。

土坑 SK-13 (第5図)

調査区北半北側で検出した。南西隅を試掘トレンチによって切られている。1.8m × 1.5m 以上の平面長方形を呈し、深さ0.4mを測る。底面はほぼ水平である。遺構覆土は地山に褐色砂を含んだもの。当初は南東側も同じ覆土であったため同一遺構として掘削を行ったが、底面が浅かったため別遺構であると判断した。両者の前後関係は不明。遺物は土師器・皿（45）が出土した。時期は14世紀以降か。

性格不明遺構 SX-2 (第6図)

調査区北半中央付近で検出した。土師器が1.3m × 0.5mの範囲で集中出土している。20枚以上の土師器が出土した。周辺の土に違いはみられず、どのような状況で廃棄もしくは埋納されたものかは不明。実測可能な土師器杯・皿は20点であった（6～25）。時期は13世紀である。

石組遺構 SX-3 (第5図)

調査区北半北西側で検出した。1.1m × 1.1m 以上の平面正方形を呈し、深さ0.2mを測る。底面はほぼ水平である。遺構覆土は地山に比べて粘土を含んでいるが差はない。径30cm前後の大きめの石が本遺構のものであり、最下段の石組のみが残ったものと考えられる。第2面の石敷遺構SX-14の上に造られており、またSX-4を切っている。図化可能な遺物は出土しなかった。時期は不明。

性格不明遺構 SX-4 (第5図)

調査区北半北西側で検出した。2.3m × 1.0m の平面長方形を呈し、深さ0.2mを測る。底面はほぼ水平である。一部は調査区範囲外に延びている。遺構覆土はSX-3同様、地山に比べて粘土を含んでいるが違いはない。南東側長辺に沿って石が並ぶが、第2面の石敷遺構SX-14が壊された際に出土した土を掘り込んで造った、素堀の土坑の可能性もある。遺物は土師器・皿（26）が出土した。時期は14世紀以降か。

石組遺構 SX-5 (第5図)

調査区北半西側で検出した。石組遺構の角部分と考えられる。内法で0.8mと0.6mの長さが残存している。SX-3に比べて径10～20cmの小さめの石で造られている。残りの約半分は別の遺構に寄つて壊されたと考えられるが、その痕跡は検出できなかった。本遺構の南東側にも約60cm石列が検出さ

れた。石組遺構あるいは石敷遺構の一部の可能性がある。遺物は陶器 壺・鉢・擂鉢(5・27・28)が出土した。時期は不明。

性格不明遺構 SX-31 (第4図)

調査区南半東端で検出した。SX-31は完形の天目2点(89・90)である。包含層掘削中に出土したが、どのような遺構に伴うのかは分からなかった。90は高台内に墨書きがある。89・90とも瀬戸産の天目の可能性がある。時期は輸入陶磁器であるならば14世紀前後、瀬戸産であるならば16世紀～17世紀である。

性格不明遺構 SX-32・33 (第6図)

調査区南半中央や北寄りで検出した。SX-33は1.0m×0.7mの範囲で石が集中出土したもので、石敷遺構の一部の可能性がある。SX-32はSX-33北東から出土した土師器壊群である。土師器壊3点が図化できた(91～93)。時期は13世紀である。

ピット P-6 (第6図)

調査区北半南側で検出した。1.0m×0.7mの平面梢円形を呈し、深さ0.15mを測る。底面はほぼ水平である。遺物は土師器・皿が出土している(222)。時期は13世紀後半～14世紀前半か。

2. 第2面

溝 SD-17 (第9図)

調査区北半西側で検出した。SX-14を切り、北東～南西方向に走る溝である。試掘トレンチに切られるが、その先では溝は検出されなかった。SX-15との前後関係は不明。残存長4.0m、幅30cm、深さ10～15cmを測る。図化可能な遺物は出土しなかった。時期は不明。

土坑 SK-34 (第9図)

調査区南半中央付近で検出した。直径80cmの円形の範囲で石が集中出土したもの。中央がやや回んだ状態であった。石敷遺構の一部とも考えられたが、半裁の結果、径110cm、深さ70cmの土坑の中層に石を集中して埋めたものであると判明した。径50cm前後の柱の基礎であろうか。遺物は瓦器・皿が出土した(94)。時期は不明。

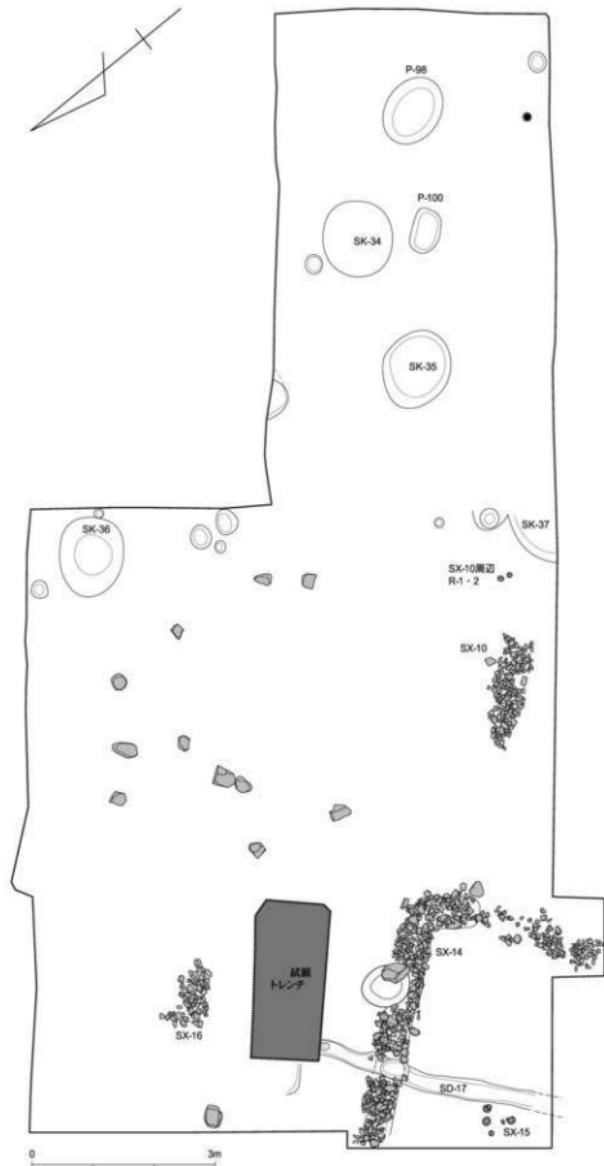
性格不明遺構 SX-10 (第9図)

調査区北半南側で検出した。1.8m×0.5mの範囲で石が集中出土したもの。第1面でも一部確認されたが、基礎となる部分は第2面であったため、第2面の遺構とした。石敷遺構の一部と考えられるが、SX-14に比べ石が小さく並べ方も一定ではないため、廃棄された石群の可能性もある。遺物は土師器皿が出土した(39・40)。時期は不明。

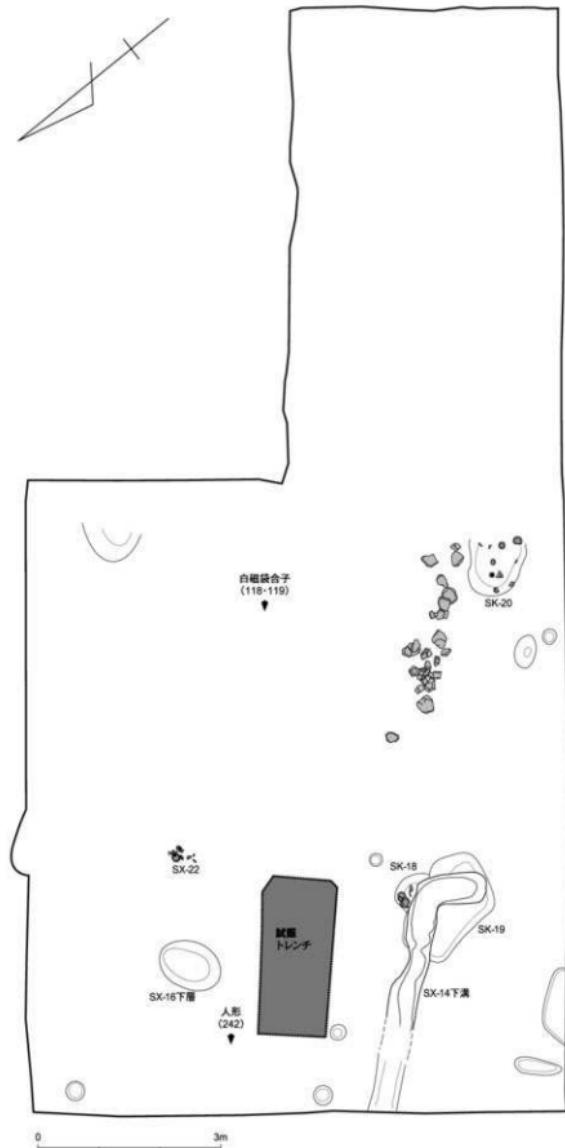
石敷遺構 SX-14 (第9図)

調査区北半西側で検出した。石敷きの幅60cm。調査区外より北西～南東方向に約4m、110°前後で南北方向に屈曲した後、石の並びがまばらになって西南西方向に並ぶ。第1面でもこの場所で石群が確認されSX-6としたが、SX-14の上層であると判断した。石を外したところ、幅40cm、深さ15cmの溝状遺構となった。この石敷遺構を造る際に溝を掘り、その中に石を敷き詰めていたものと考えられる。溝が屈曲部部分でとぎれ、石の並びもまばらになるのは、この先が破壊されたためと推定される。従って屈曲部より先是旧状を留めていない可能性がある。博多遺跡群では類例があり、建物の基礎と考えられる。遺物は上層のSX-6から土師器・皿(29)、陶器 壺・甕(30・31)、土師質土器・片口(32)、備前擂鉢(33)が、下層のSX-14から陶器・耳壺(46)、土師器・皿(47～49)が出土した。

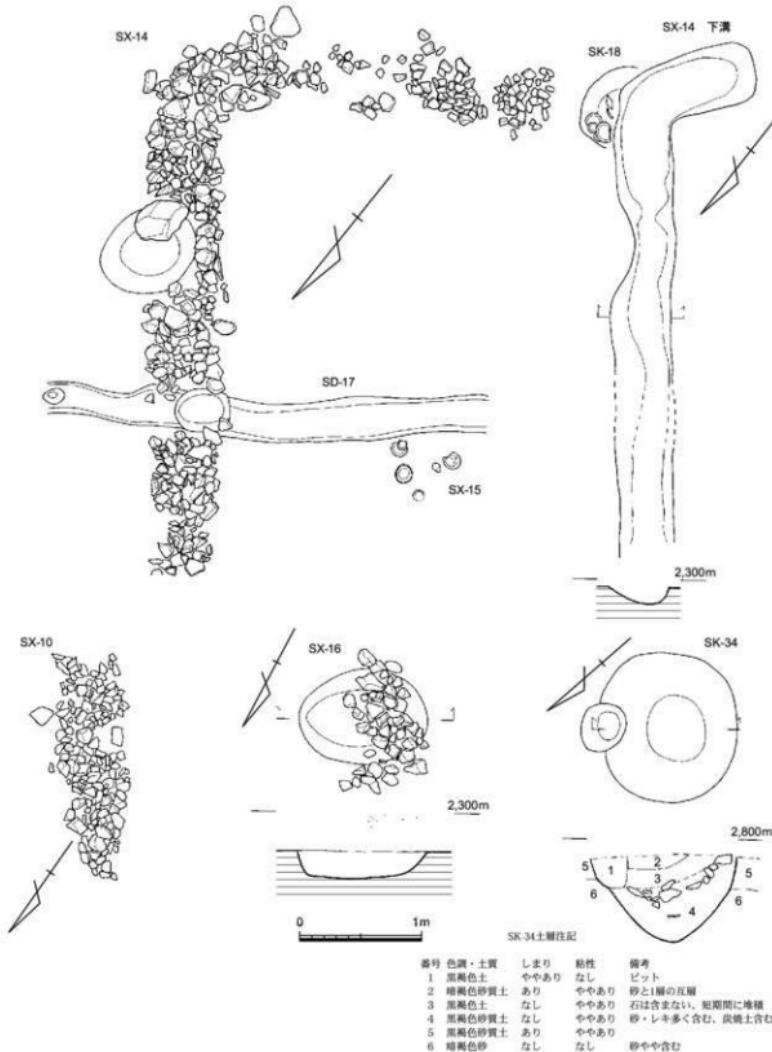
時期は14世紀以前であろう。



第7図 博多遺跡群第160次調査 第2面全体図 (1/80)



第8図 博多遺跡群第160次調査 第3面全体図 (1/80)



第9図 SX-10・SX-14・SX-16・SD-17・SK-34 (1/40)

性格不明遺構 SX-15（第9図）

調査区北半西側で検出した。土師器が直径60cmの円の範囲で集中出土している。6枚以上の土師器皿が出土した。周辺の土に違いはみられず、どのような状況で廃棄もしくは埋納されたものかは不明。SX-15との前後関係も不明。図化可能な遺物は土師器壊・皿6点であった（50～55）。時期は13世紀前半～14世紀後半である。

性格不明遺構 SX-16（第9図）

調査区北半北側で検出した。1.2m×0.6mの範囲で石が集中出土したもの。第3面調査時にSX-16と同じ場所で土坑が確認され、第3面の土坑と第2面の石群を同一の遺構SX-16とした。石の並びと、土坑の方向が一致しないため、別の遺構である可能性もある。石敷遺構の一部あるいは柱の基礎と考えられるが、SX-14に比べ石が小さく並べ方も一定ではないため、廃棄された石群の可能性もある。図化可能な遺物は出土しなかった。時期は不明。

3. 第3面

土坑 SK-18（第6図）

調査区北半西側、SX-14屈曲部の下で検出した。70cm×50cm以上の平面楕円形を呈する土坑。深さ20cmを測る。SK-19に切られた後、SX-14下溝に切られる。遺物は土師器壊・皿（56～60）が出土した。時期は13世紀前半である。

土坑 SK-19（第6図）

調査区北半西側、SX-14屈曲部の下で検出した。170cm×100cmの平面隅丸長方形を呈する土坑。深さ20cmを測る。SK-18を切った後、SX-14下溝に切られる。図化可能な遺物は出土しなかった。時期は不明。

土坑 SK-20（第6図）

調査区北半南端で検出した。100cm×100cm以上を測る平面格円形を呈する土坑。深さ30cmを測る。遺構は調査区南半に延びるが、南半調査時に続きを見つけることができなかった。遺物は土師器壊・皿（61～69）が出土した。時期は13世紀後半である。

4. 第4面

井戸 SE-25（第11図）

調査区北半西側で検出した。上面で4.5m×3.5m以上、中段屈曲部で3.5m×3.0m以上の平面楕円形を呈する井戸。深さ1.0m、標高0.800mの高さで湧水があり、これ以上の掘削が困難であったためこの深さで掘り下げを中断した。SK-26を切っている遺物は土師器壊・皿（78・79）、青磁・碗（80）が出土した。時期は13世紀である。

井戸 SE-26（第11図）

調査区北半西側南寄りで検出した。1.9m×1.5m以上の平面楕円形を呈する土坑。深さ80cmを測る。床面はほぼ水平である。床面中央に直径60cm深さ30cmの土坑を検出した。側板は残存していなかったが、その形状から井戸と推定される。SE-25に切られている。遺物は瓦玉（81）が出土した。時期は不明。

土坑 SK-23（第12図）

調査区北半北側で検出した。1.9m×1.3m以上の平面楕円形を呈する土坑。深さ40cmを測る。床面はほぼ水平である。図化可能な遺物は出土しなかった。時期は不明。

土坑 SK-24 (第 11 図)

調査区北半北側東寄りで検出した。2.4m × 1.4m 以上の平面楕円形を呈する土坑。深さ 50cm を測る。床面は地山の傾斜に合わせて北西が高く南東が低い。中層や下寄りからレキと遺物が出土した。遺物は土師器 坯・皿 (76・77) が出土した。時期は 13 世紀前半である。

土坑 SK-27 (第 12 図)

調査区北半南側で検出した。2.4m × 1.6m 以上の推定平面隅丸長方形を呈する土坑。深さ 30cm を測る。南側の一部は調査区南半に延びるが、南半調査時に発見できなかった。床面に 3 基のピットと 2 基の土坑を有する。遺物は土師器・坯 (82) が出土した。時期は 13 世紀後半か。

土坑 SK-29 (第 12 図)

調査区北半西側で検出した。1.2m × 1.7m 以上の推定平面隅丸長方形を呈する土坑。深さ 30cm を測る。床面に 3 基のピットと 2 基の土坑を有する。南東側を SE-25 に切られている。遺物は土師器・坯 (83) が出土した。時期は 13 世紀中頃か。

土坑 SK-30 (第 12 図)

調査区北半北側で検出した。1.5m × 1.2m の平面楕円形ないし隅丸長方形を呈する土坑。深さ 30cm を測る。遺物は土師器 坯・皿 (84 ~ 88) が出土した。時期は 13 世紀後半か。

調査区南半石列 (第 10 図・PL10-3)

調査区南半北側で検出した。ほぼ等高線の方向に沿うように並んでいる。SK-35 に切られている。遺物は出土しなかった。地山砂丘がこの石列付近を境にして明確でなくなっていくことや、石列より南側でほとんど遺構が検出されなかったことから、この石列が当時の入り江部分と集落部分との境であった可能性がある。

5. その他出土遺物

本調査地点では遺構出土遺物は少なく、遺構外の包含層出土の遺物が大半であった。第 16 図から第 21 図に遺構外出土遺物で図化可能なものを示した。土師器・陶磁器・瓦器・瓦は出土層ごとに並べ、それ以外の特異な遺物は遺構出土・遺構外出土分も併せて第 21 図に示した。また、出土銭貨は一覧表 (第 2 表) にまとめた。

土師器 皿・環は各層から多数出土している。図化可能だった分は全てロクロ成形の底面回転系切り離しであり、時期は 13 世紀から 14 世紀が大半である。

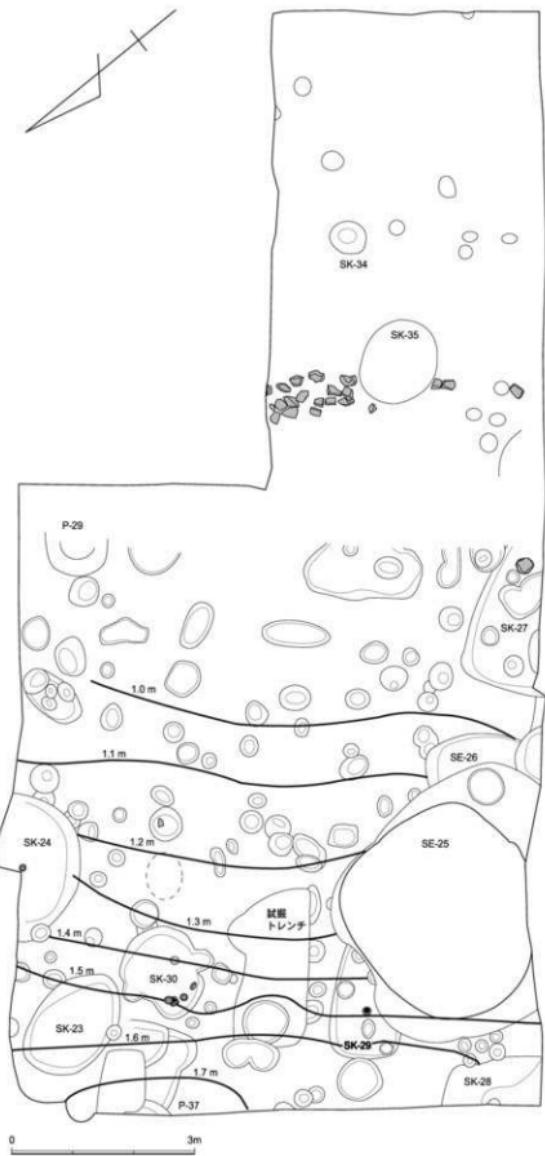
陶磁器は輸入陶磁器として龍泉窯系青磁 I・II・III・IV 類、同安窯系青磁 I 類、白磁皿 IV・IX 類、白磁碗 IX 類、が出土している。一部に朝鮮陶磁器・ベトナム陶磁器・明代の青花も出土している。また国内産陶磁器として瀬戸産のおろし皿 (101) などが出土している。

瓦器は層序で述べた②暗褐色砂層 (調査時は黒褐色土下層とした) から多く出土している (151 ~ 158)。瓦器は中世前期、12 世紀頃使用されていたものである。

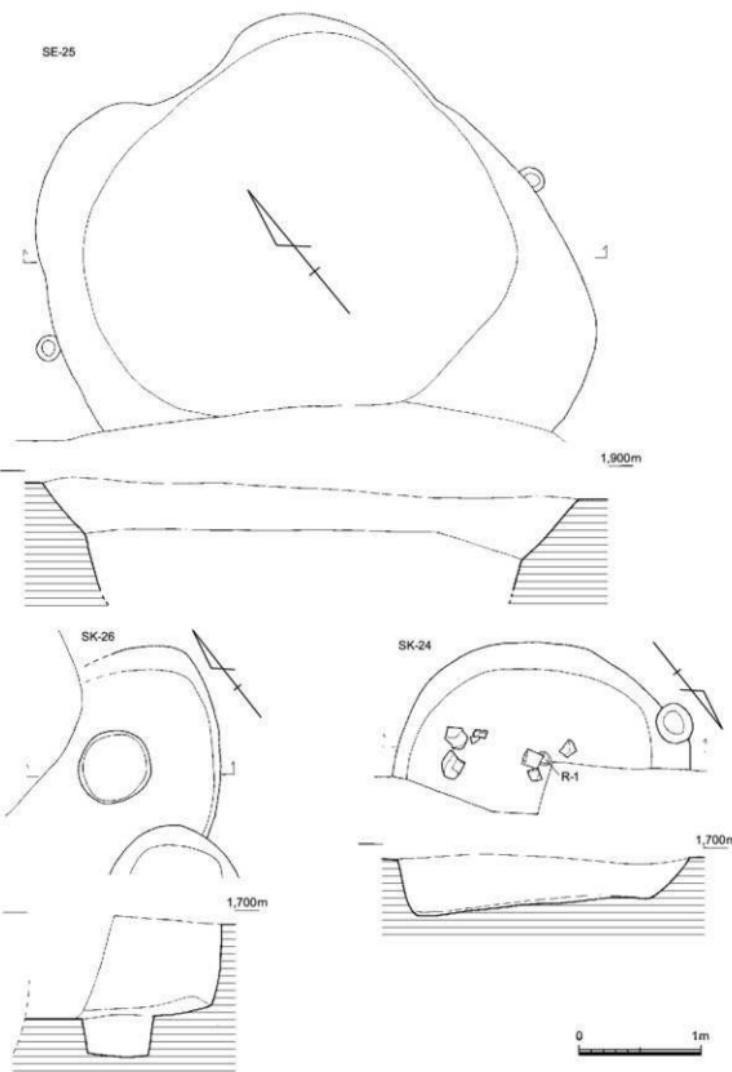
瓦はほとんど出土しなかったが、押庄文軒平瓦 (159) が 1 点出土している。

それ以外の遺物として滑石製石鍋、硯、砥石、滑石製錘、土製錘、石鍋転用品、骨製品、人形、フイゴ羽口、鉄滓が出土している。人形は唐人二人が肩を寄せ合っている姿を模したものである (242)。第 3 面から出土した。フイゴ羽口 (245・246) と鉄滓 (247) の時期は不明だが、この場所で製鉄が行われていた証拠といえる。

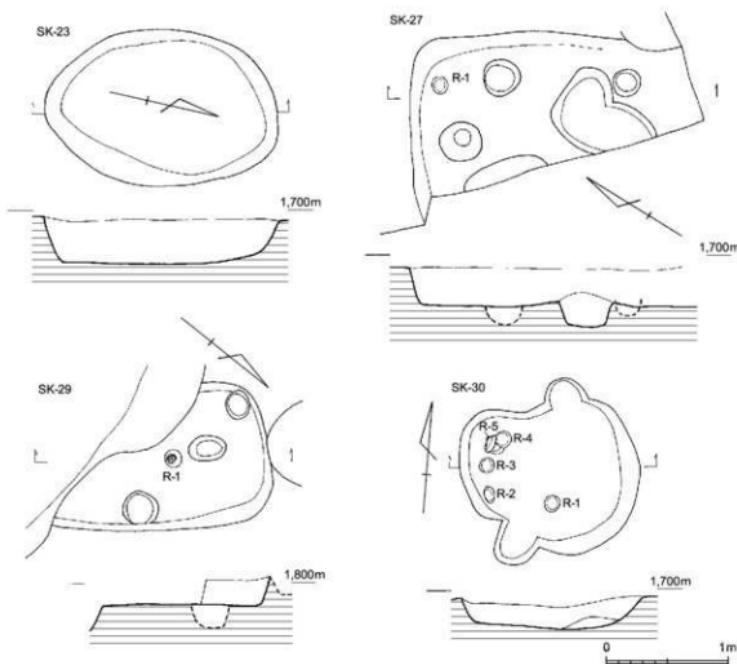
銭貨は 258 点出土し、178 点が判読可能で、34 銭種あった。258 点のうち 2 点が鉄錢であった。至元通寶 (元・初鑄 1285 年) が 1 点出土した (255)。博多遺跡群でも出土例の少ないものである。



第10図 博多遺跡群第160次調査 第4面全体図 (1/80)



第11図 SE-25・SK-24・SK-26 (1/40)



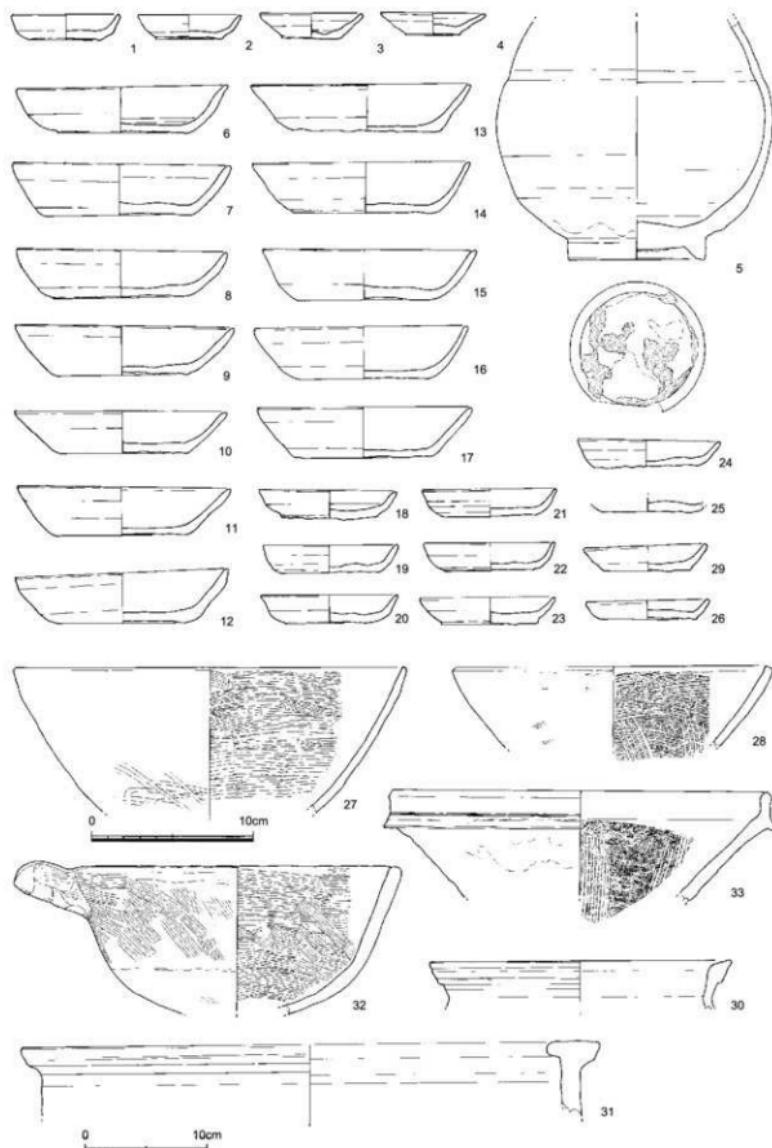
第12図 SK-23・SK-27・SK-29・SK-30 (1/40)

IV. 小 結

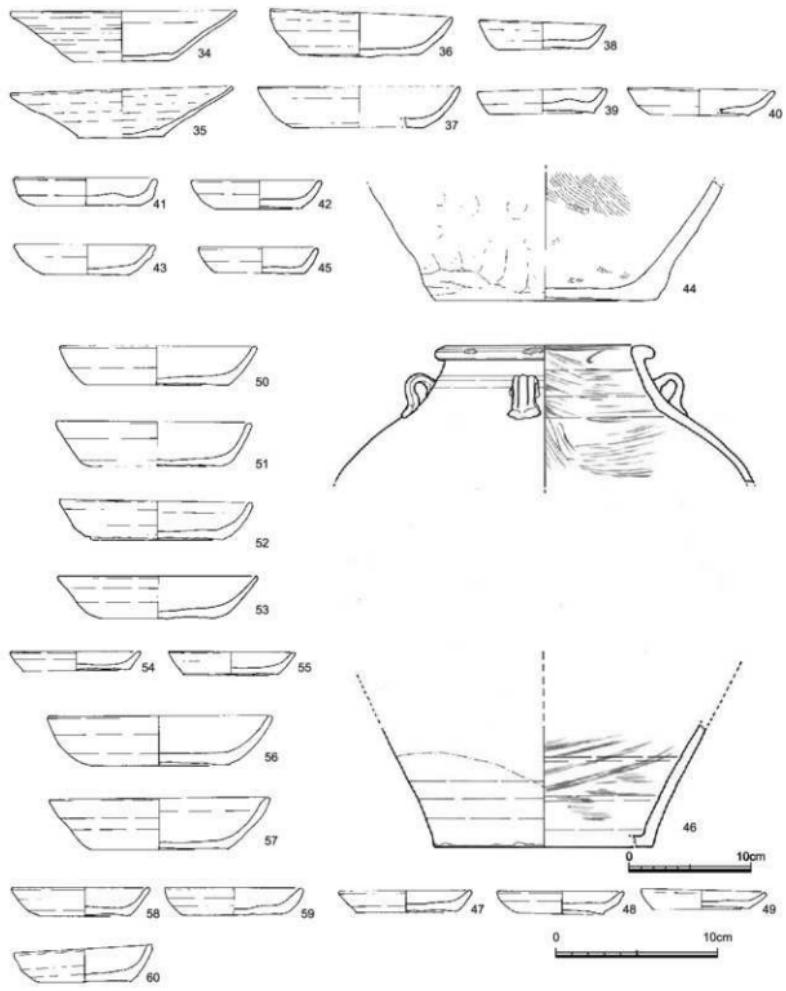
検討の結果、本調査地点は南側に向かって傾斜する砂丘の縁であり、この傾斜面につくられた最も古い遺構面（第4面）の時期は13世紀であることが分かった。南半の石列を境に遺構自体がなくなることから、この時期の息浜と博多浜の入り江の汀線が本調査地点南半付近を通過することが想定される。

遺物で最も古いものは最下層から出土した12世紀代の瓦器であるが、本調査地点ではその時代の遺構は検出されなかった。砂丘の上側にあたる本調査地点北側には12世紀の遺構が存在する可能性がある。その後、第2面の石敷遺構SX-14がつくられた14世紀以降には、傾斜が黒色系砂質土によって埋められ、水平な土地になっていたと考えられる。

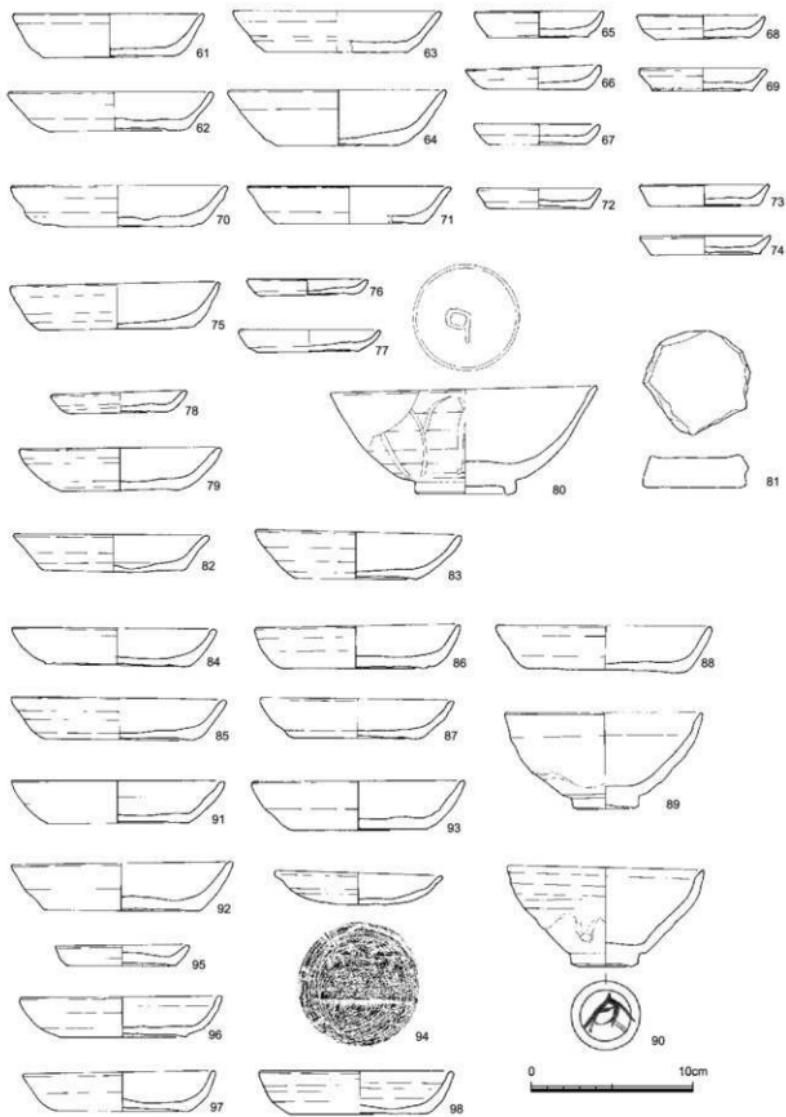
近世以降は土地利用がさらに盛んに行われたようであり、第1面の石組遺構が壊されて残存状況が悪いことや、第1面から礎石と考えられる石が多数検出されたことなどから明らかである。



第13図 SK-1・4 SX-2・5・6出土遺物 (1/3・1/4)

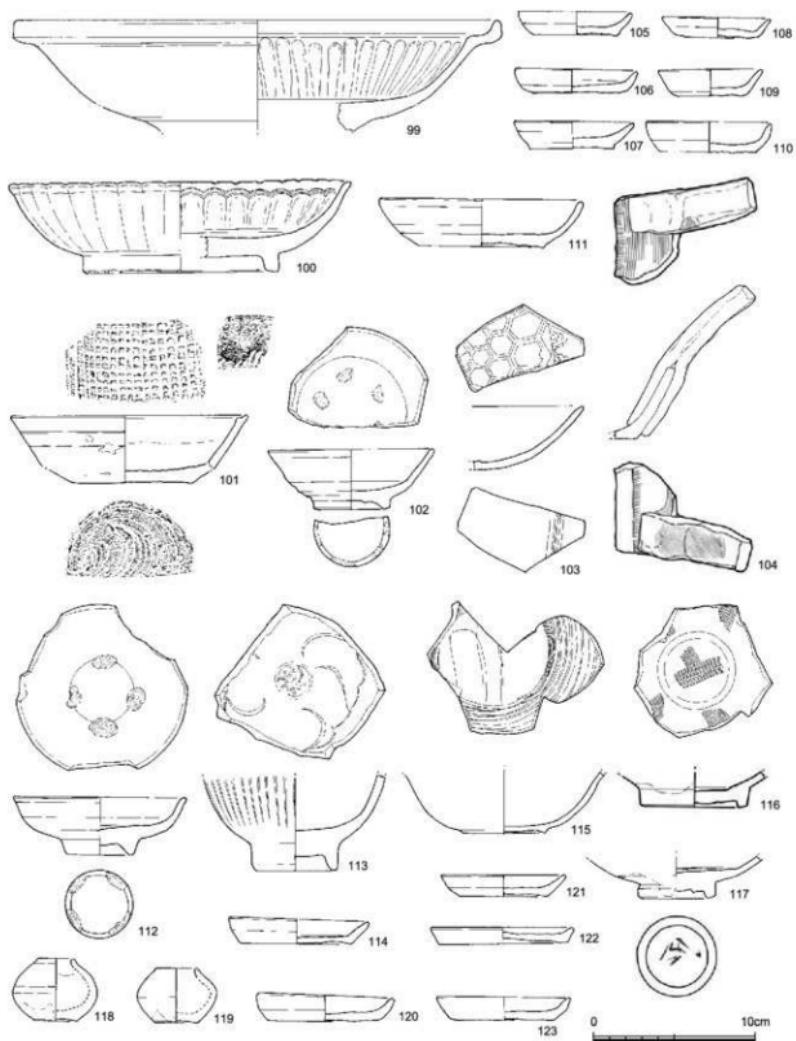


第14図 SK-12・13・15・18 SX-8・10・11・14 出土遺物 (1/3・1/4)

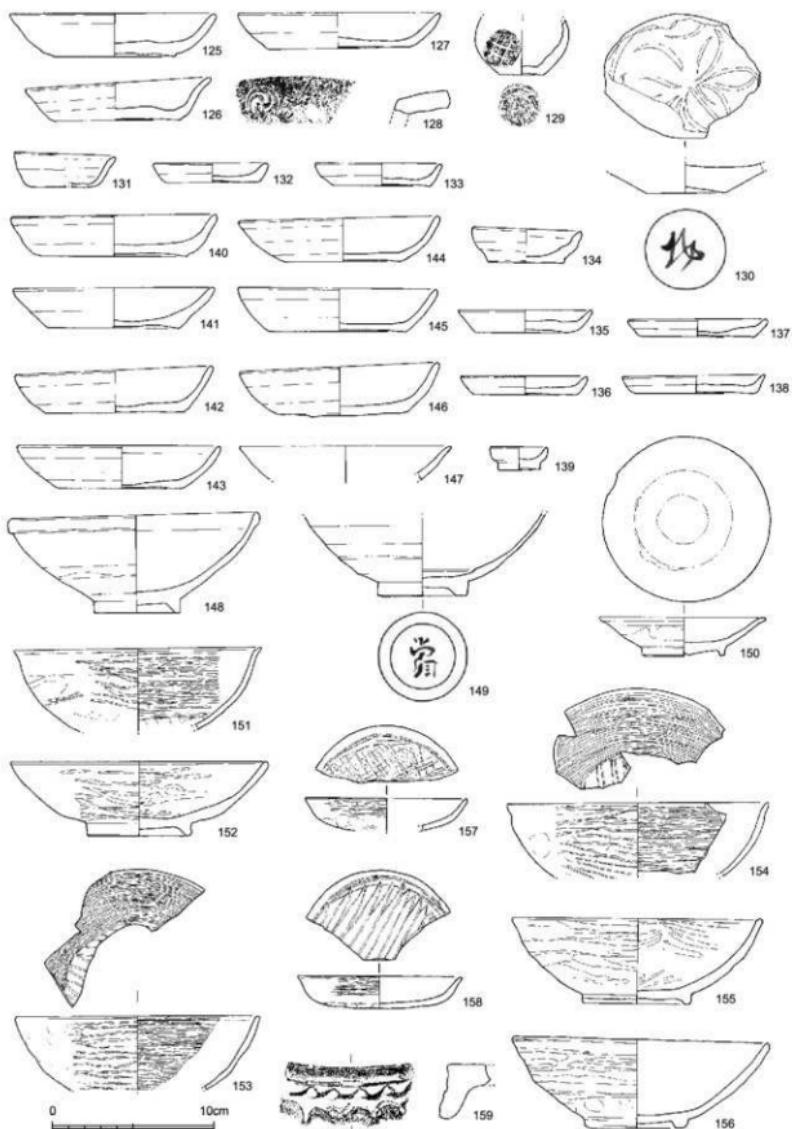


第15図 SE-25・26 SK-20・24・27・29・30・35 SX-22・31・32出土遺物 (1/3)

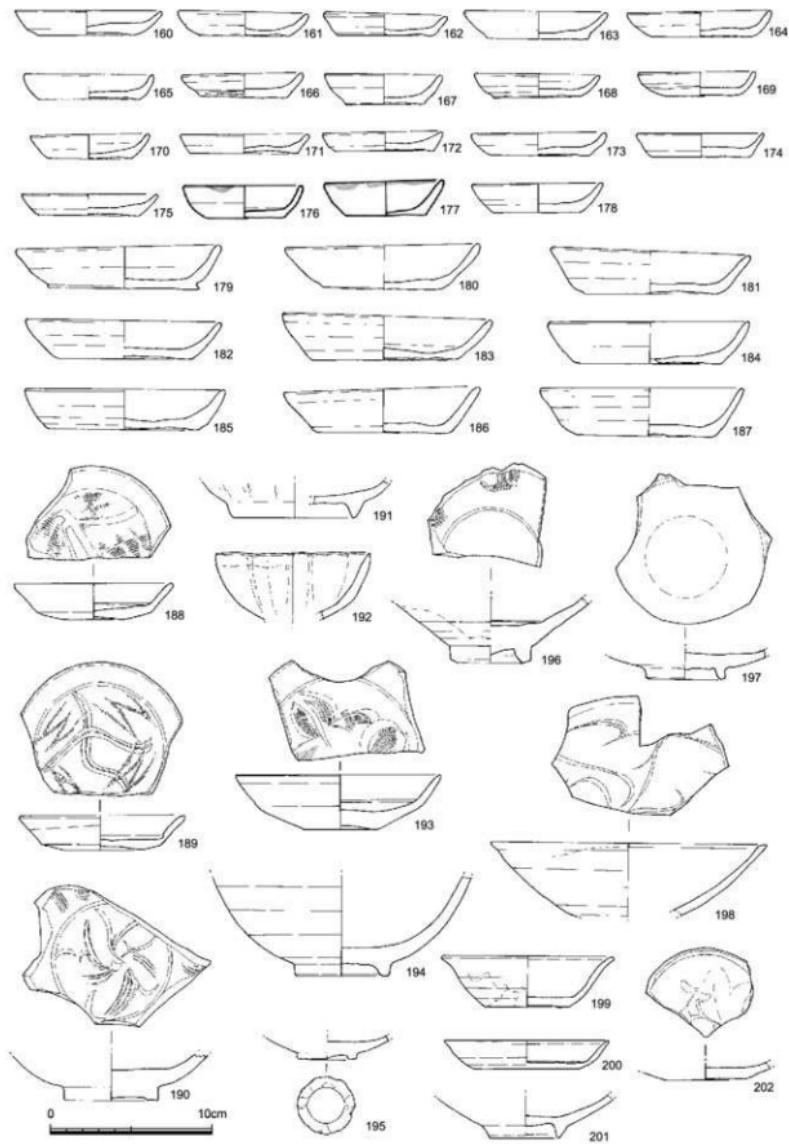
第1表 遺構出土遺物觀察表



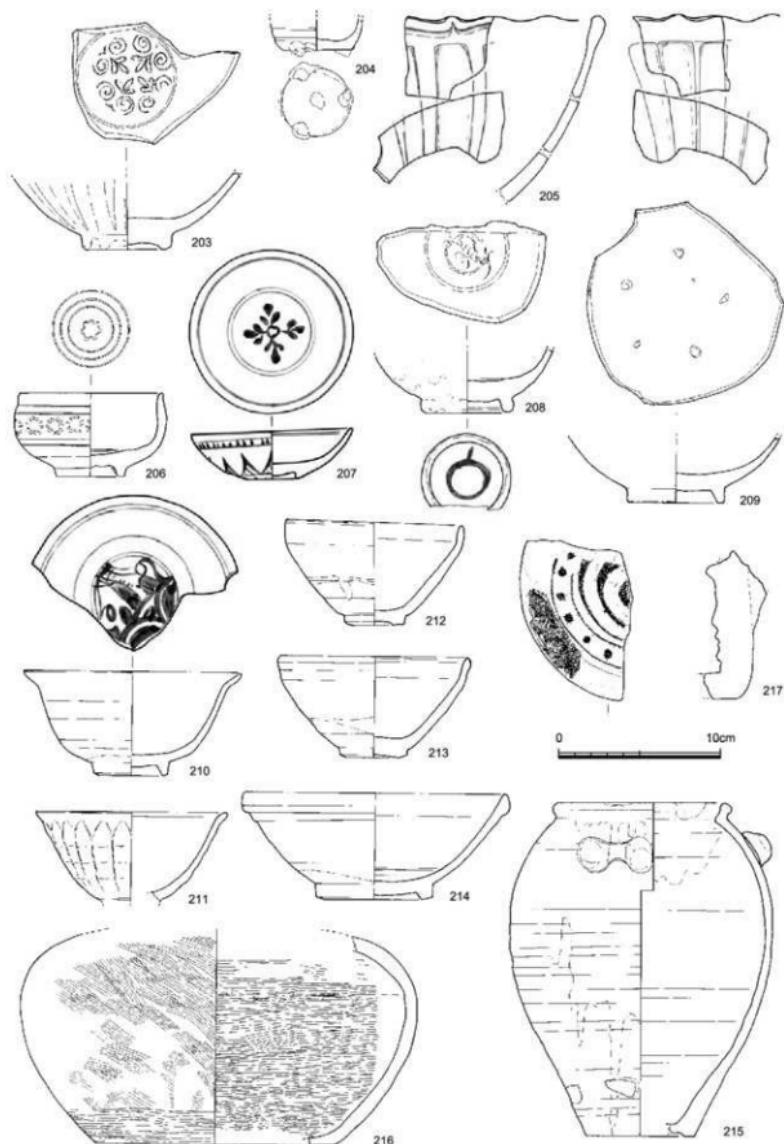
第16図 遺構外出土遺物その1 (1/3)



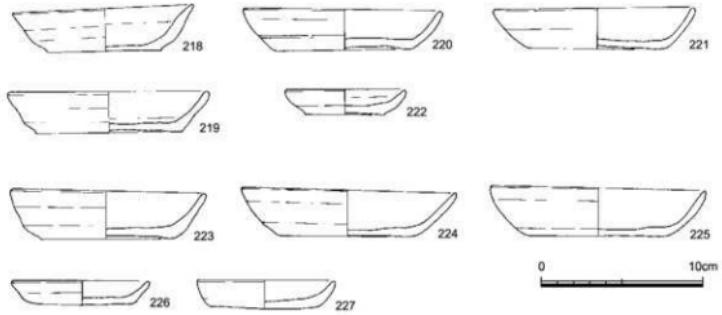
第17図 遺構外出土遺物その2 (1/3)



第18図 遺構外出土遺物その3 (1/3)

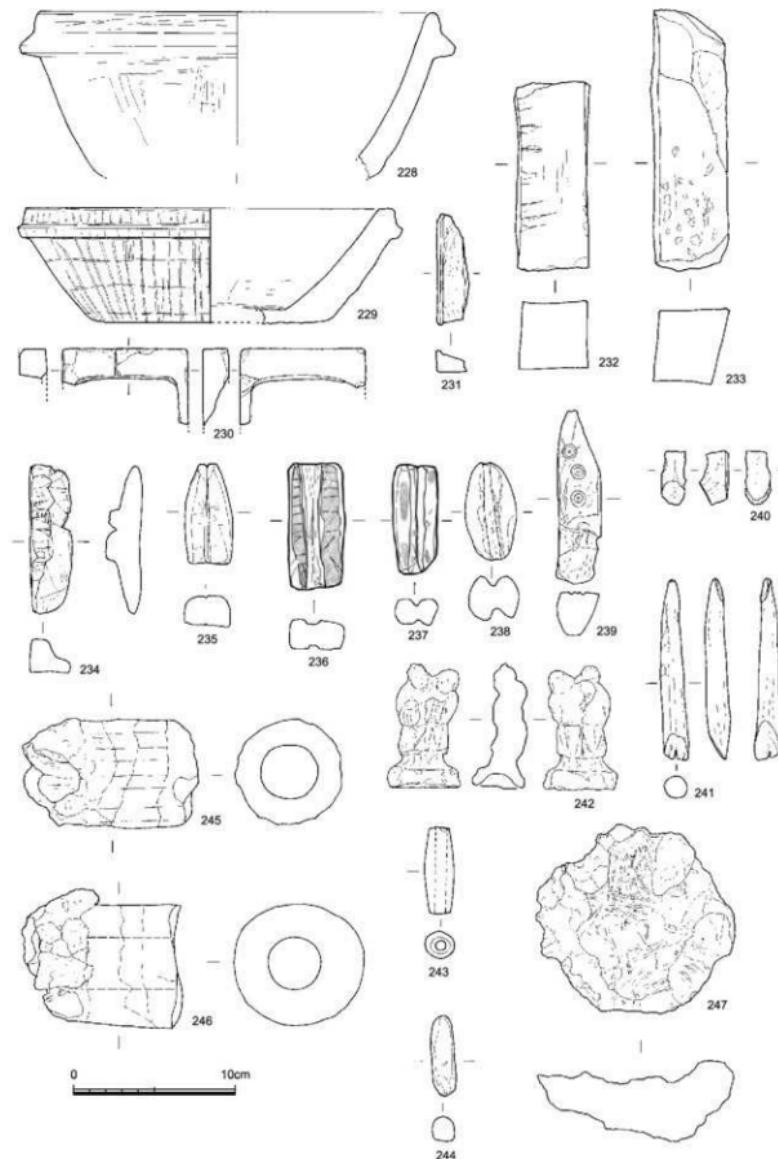


第19図 遺構外出土遺物その4 (1/3)



第20図 遺構外出土遺物その5 (1/3)

第2表 出土銀貨觀察表



第21図 石製品・骨製品・土製品・製鉄関連遺物 (1/3)

第3表 遺構外出土遺物観察表その1

測面	番号	出土遺物	位置・層位	器形・部品	法線 cm L		法線元・残 存性	測定 値	測定 方法	測定 結果	鉛土	色調・種	調整	良好	備考(海底分類は大字分類による)
					法線	cm L									
第16回	99		上鉢底時	青磁・鉢	(360)		渕白・黒織合青む き・水裂			渕白・厚くかから大き き・水裂	ロクロ・ハラ織り葡萄	良好	電着鉢底類?		
第16回	100		上鉢底時	青磁・瓶	21.0	12.0	54	渕白・黒織合青む き・手輪・直筒	渕白・透明釉・やや白 度・織から水裂	ロクロ・西内側リボン 直筒	良好	電着青・西内側の 輪脚・輪花の口継	現代・電着青・西内側の 輪脚・輪花の口継		
第16回	101		上鉢底時	陶器・おろし皿	(166)	7.3	41	54	渕白・直筒・輪脚	ロクロ・底面凹凸切 合	良好	廻	廻		
第16回	102		上鉢底時	陶器・瓶	102	46	37	渕白・口以下白の口 縁・直筒・手輪・手輪	ロクロ・リップを透明釉 手輪	ロクロ・西内側リボン 直筒	良好	季朝・足込及び舟付斜口			
第16回	103		上鉢底時	青磁・瓶				渕白・口以上手輪 手輪・手輪	オーバー透明釉 手輪	ロクロ	良好	丸平瓶			
第16回	104		上鉢質土器・切株?	把手灰 11.4 27~30	把手幅 把手幅	51	51	14	把手合	把手灰・直筒	ナゾ	良好	把手四方		
第16回	105		上鉢底時	上鉢器・瓶	2.1			把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 側ナゾ	良好				
第16回	106		上鉢底時	上鉢器・瓶	7.5		51	15	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 側ナゾ	良好			
第16回	107		上鉢底時	上鉢器・瓶	7.4		51	19	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 側ナゾ・内底ナゾ	良好			
第16回	108		上鉢底時	上鉢器・瓶	5.7		41	13	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 側ナゾ	良好			
第16回	109		上鉢底時	上鉢器・瓶	6.5		42	16	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 側ナゾ・内底ナゾ	良好			
第16回	110		上鉢底時	上鉢器・瓶	7.8		57	18	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 側ナゾ・内底ナゾ	良好			
第16回	111	南手	黒褐色土上層?	上鉢器・片	(125)	27	29	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 側ナゾ・内底ナゾ	良好				
第16回	112		上鉢底時	陶器・瓶	106	12	35	渕白・口以上手輪 手輪・手輪・手輪	渕白・透明釉	ロクロ・西内側リボン 直筒	良好	季朝・足込及び舟付斜口			
第16回	113		黒褐色土中層?	上鉢器・瓶	4.9			渕白・黒織合青む き・水裂	渕白・黒織合青む き・水裂	ロクロ・西内側リボン 直筒	良好	薄分多電氣瓶V型			
第16回	114		黒褐色土中層?	上鉢器・瓶	8.6		70	14	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 側ナゾ・内底ナゾ	良好			
第16回	115	南手	上鉢底時	瓦器・瓶		51		渕白・直筒	渕白を帯びた灰白 ハマ野持			底部のみ			
第16回	116	南手	上鉢底時	白磁・瓶	6.5			渕白・直筒	渕白を帶びた灰白不 規則・直筒	ロクロ・西内側リボン 直筒	良好	碗底?	底部のみ		
第16回	117	南手	上鉢底時	青磁・瓶		48		把手合	オーバー透明釉	ロクロ・西内側リボン 直筒	良好	瓶底のみ	西内側内唇		
第16回	118	南手	9.1	白磁・盤合子	2.2	26	38	把手合	把手灰	ロクロ・オーバー透明 釉	良好				
第16回	119	南手	9.1	白磁・盤合子	2.6		27	33	把手合	把手灰	オーバー透明釉	良好			
第16回	120	南手	青磁質土下層?	上鉢器・瓶	6.5	61	18	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 側ナゾ	良好				
第16回	121	南手	青磁質土下層?	上鉢器・瓶	2.6	51	13	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好				
第16回	122	南手	青磁質土下層?	上鉢器・瓶	8.8		79	12	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 側ナゾ	良好			
第16回	123	南手	青磁質土下層?	上鉢器・瓶	8.1		63	14	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 側ナゾ	良好			
第17回	124	北手	黒褐色土上層?	上鉢器・片	12.7	7.0	29	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好				
第17回	125	北手	黒褐色土上層?	上鉢器・片	11.5	80	26	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好				
第17回	126	北手	上鉢器・片		12.5	66	22	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 底ナゾ	良好				
第17回	127	北手	黒褐色土上層?	上鉢質・火鉢				Dm以下の石灰・基 礎					真柱	口縁内側に枝スラン	
第17回	128	北手	黒褐色土上層?	陶器・小皿		38		渕白色	渕白色	ロクロ・底面凹凸切 合	良好	口縁	全縁		
第17回	129	北手	黒褐色土上層?	陶器・小皿		49		渕白色・黒色多く 青む	渕白色・黒色多く 青む	ロクロ・オーバー透明 釉	良好	電着灰	1.1b型・器身		
第17回	130	北手	黒褐色土上層?	灰質土?	4.2		35	21	把手合	把手灰	手付	良好			
第17回	131	北手	黒褐色土上層?	上鉢器・片	7.0	57	12	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合・内 底ナゾ	良好				
第17回	132	北手	黒褐色土上層?	上鉢器・片	7.8	60	14	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好				
第17回	133	北手	黒褐色土上層?	上鉢器・片	8.6	60	14	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好				
第17回	134	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	6.7		47	22	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好			
第17回	135	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	8.2	60	14	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好				
第17回	136	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	7.8	61	12	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好				
第17回	137	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	8.6		70	11	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好			
第17回	138	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	8.8	73	13	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好				
第17回	139	北手	黒褐色土下層?	白磁・ニミニュア	3.6		26	15	渕白色	透明釉・青筋	ロクロ?				
第17回	140	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	12.7	99	26	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好				
第17回	141	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	12.4		80	26	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好			
第17回	142	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	12.2	84	28	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好				
第17回	143	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	12.6		76	27	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好			
第17回	144	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	12.5		70	28	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好			
第17回	145	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	12.4		83	27	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好			
第17回	146	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	12.3		27	32	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好			
第17回	147	北手	黒褐色土下層?	上鉢器・片	12.5		83	27	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好			
第17回	148	北手	黒褐色土下層?	白磁・瓶	15.5	53	61	把手合	把手灰・青及び白色 混じて青色多く 青む	渕白色・青及び白色 混じて青色多く 青む	ロクロ・西内側リボン 直筒	良好	青及び白色 混じて青色多く 青む	西内側内唇	
第17回	149	北手	黒褐色土上層?	白磁・瓶		51	24	把手合	把手灰・青及び白色 混じて青色多く 青む	渕白色・青及び白色 混じて青色多く 青む	ロクロ・西内側リボン 直筒	良好	青及び白色 混じて青色多く 青む	青及び白色 混じて青色多く 青む	
第17回	150	北手	黒褐色土上層?	瓦器・瓶	10.3		51	24	把手合	把手灰	ロクロ・直筒・切合	良好	青及び白色 混じて青色多く 青む	青及び白色 混じて青色多く 青む	
第17回	151	北手	黒褐色土下層?	瓦器・瓶	[152]			把手合	把手灰	把手灰	良好				
第17回	152	北手	黒褐色土下層?	瓦器・瓶	15.8		64	45	把手合	把手灰	把手灰	良好			
第17回	153	北手	黒褐色土下層?	瓦器・瓶	[156]			把手合	把手灰	把手灰	良好				
第17回	154	北手	黒褐色土下層?	瓦器・瓶	[160]			把手合	把手灰	把手灰	良好				

第3表 遺構外出土遺物観察表その2

回収 番号	出土遺物	位置・層位	器種・部形	法線 cm L		寸法 幅×高さ	記述	地質・種	調整	良成 基準	備考(海田分類は太字部分 による)
				寸	幅						
第17回 155	黒褐色土下層	瓦部・底	(15.0)	67	57	縦直		灰	ハラ跡き	良好	
第17回 156	黒褐色土下層	瓦部・底	(15.0)	60	57	縦直		灰・内灰白・下	ハラ跡き	良好	
第17回 157	北半	黒褐色土下層	瓦部・底	(10.0)			灰白・白無筋合む、黒を帯びた灰	灰	ハラ跡き、当孔隙押さえ	良好	
第17回 158	北半	黒褐色土下層	瓦部・底	(10.0)	20	20	黒及び白無筋合む、灰	灰	ハラ跡き、外底押さえ	良好	
第17回 159	黒褐色土下層	斜平瓦				縦直・白縫合子舌	灰			良好	組合せ
第18回 160	南半	黒褐色土	土頭部・底	8.9	60	16	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切・板 状灰・内灰ナメ	良好	
第18回 161	南半	黒褐色土	土頭部・底	8.1	55	15	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 162	南半	黒褐色土	土頭部・底	7.6	58	14	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ	良好	
第18回 163	南半	黒褐色土	土頭部・底	8.8	62	17	縦直	洪度	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ	良好	
第18回 164	南半	黒褐色土	土頭部・底	8.8	61	12	縦直	灰白・洪度	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 165	南半	黒褐色土	土頭部・底	8.0	62	15	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 166	南半	黒褐色土	土頭部・底	7.6	51	15	縦直	洪度	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ	良好	
第18回 167	南半	黒褐色土	土頭部・底	7.2	49	19	縦直	浅青緑・細	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ	良好	
第18回 168	南半	黒褐色土	土頭部・底	7.2	55	16	縦直	浅青緑	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ	良好	
第18回 169	南半	黒褐色土	土頭部・底	7.2	45	15	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ	良好	
第18回 170	南半	黒褐色土	土頭部・底	7.3	53	15	縦直	浅黄緑	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ	良好	
第18回 171	南半	黒褐色土	土頭部・底	8.0	66	12	縦直	洪度	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 172	南半	黒褐色土	土頭部・底	7.4	60	12	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ	良好	
第18回 173	南半	黒褐色土	土頭部・底	8.3	63	15	縦直	にぬい・細	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 174	南半	黒褐色土	土頭部・底	7.8	60	15	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ	良好	
第18回 175	南半	黒褐色土	土頭部・底	8.3	62	17	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 176	南半	黒褐色土	土頭部・底	7.3	47	20	縦直	粗	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ	良好	
第18回 177	南半	黒褐色土	土頭部・底	7.3	50	22	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・摩滅	良好	全体付着
第18回 178	南半	黒褐色土	土頭部・底	8.1	51	18	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ	良好	
第18回 179	南半	黒褐色土	土頭部・底	12.7	9.3	28	縦直	灰白	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 180	南半	黒褐色土	土頭部・底	1.0	7.5	27	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 181	南半	黒褐色土	土頭部・底	12.3	80	29	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 182	南半	黒褐色土	土頭部・底	12.0	80	23	縦直	にぬい・縦	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 183	南半	黒褐色土	土頭部・底	13.0	90	29	縦直	浅青緑	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ	良好	
第18回 184	南半	黒褐色土	土頭部・底	12.5	85	26	縦直	粗	ロクロ・回転・手切・内 底ナメ・内灰ナメ	良好	
第18回 185	南半	黒褐色土	土頭部・底	12.4	92	25	縦直	浅青緑	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 186	南半	黒褐色土	土頭部・底	12.1	82	29	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 187	南半	黒褐色土上部	土頭部・底	12.5	80	30	縦直	にぬい・黄緑	ロクロ・回転・手切	良好	
第18回 188	南半	黒褐色土	青緑・底	(9.5)	35	22	灰白・2mm以下の黒 点が若干散在する・乳白色	ガス質・水裂	ロクロ	良好	洞安第1-b類
第18回 189	南半	黒褐色土	青緑・底	(8.1)	46	21	灰白・縦直	#リーフ透明樹・一部水裂	ロクロ	良好	洞安第1-b類
第18回 190	南半	黒褐色土	青緑・底	5.8			灰白・黒無筋合む	#リーフ透明樹・条 理	ロクロ・黄古風り出し	良好	電気第1・2a・底部のみ
第18回 191	南半	黒褐色土	青緑・底	(7.1)			灰白・透明樹・薄 い	ロクロ・黄古風り出し	良好	電気第2・3類	
第18回 192	南半	黒褐色土	青緑・小網	(9.0)			灰白・黒無筋合む	ロクロ・回転打ち	良好	電気小網類	
第18回 193	南半	黒褐色土	青緑・底	(12.4)	41	34	灰白・黒及び白無筋合 む	灰白・帶びた緑(過 酸化銀)	ロクロ	良好	電気小網1-1c類
第18回 194	南半	黒褐色土	青緑・底	5.8			灰白・大きめの気泡有 り	不透明樹	ロクロ・灰古風り出し し	やや 崩れ	洞安のみ
第18回 195	南半	黒褐色土	白緑・底	3.7			灰白・帶びた灰(白 無筋)	ロクロ・灰古風り出し し	良好		
第18回 196	南半	黒褐色土	青緑・底	(5.0)			灰白・走査方向多 く	ロクロ・#リーフ透明樹・水 裂	ロクロ・黄古風り出し し	良好	洞安第1・底部残存
第18回 197	南半	黒褐色土	青緑・底	5.0			灰白・無筋合	ロクロ・黄古風り出し し	良好	洞安第2・3類	
第18回 198	南半	黒褐色土	青緑・底	(17.0)			灰白・黒無筋合 み(乳白色)	ロクロ	良好	洞安第2	
第18回 199	南半	黒褐色土	白緑・底	10.8	52	31	灰白・黒無筋合 む(不透明樹)	ロクロ	良好	洞安1-b類	
第18回 200	南半	黒褐色土	白緑・底	10.2	63	18	灰白・黒無筋合 む(不透明樹)	ロクロ	良好	洞安1-a類	
第18回 201	南半	黒褐色土	青緑・底	(4.4)			灰白・黒無筋合 む(乳白色)	ロクロ・黄古風り出し し	良好	電気第2・3類・底部のみ	
第18回 202	南半	黒褐色土	白緑・底	(4.8)			やや古風・乳白色 の水裂	ロクロ・黄古風り出し し	良好		
第19回 203	南半	黒褐色土	青緑・底	5.5			灰白・乳白色多 く	ロクロ	良好		
第19回 204	南半	黒褐色土	青緑・底	4.2			灰白・無筋多 く	ロクロ	良好	電気第3・4類・底部のみ	
第19回 205	南半	黒褐色土	青緑・鉢	5.9			灰白・黒無筋合 む(乳白色)	ロクロ・#リーフ透明樹・ 鉢	良好	季別	
第19回 206	南半	黒褐色土	青緑・鉢	4.2	5.1		灰白・黒無筋合 む(乳白色)	ロクロ・白無筋合 む(乳白色)	季別	季別	
第19回 207	南半	黒褐色土	青花・底	10.0	30	31	白・横直	ロクロ・#リーフ透明樹	良好	年代末・前後	
第19回 208	南半	黒褐色土	青花・底	5.6			灰白・白無筋合 む(乳白色)	ロクロ・白無筋合 む(乳白色)	良好	季別	
第19回 209	南半	黒褐色土	白緑・底	5.9			灰白・白無筋合 む(乳白色)	ロクロ・#リーフ透明樹・ 鉢	良好	季別・底部のみ	
第19回 210	南半	黒褐色土	青花・底	13.4	15	6.5	白・横直	ロクロ・白無筋合 む(乳白色)	良好	明代・春後	

第3表 遺構外出土遺物観察表その3

測面	番号	出土遺物	位置・層位	器形・部品	法線 cm I II III IV V VI			鉛土	色調・種	調整	良否	備考(海田分類は大字別分類による)
					口沿	側面	底盤					
第19回	211	南半	黒褐色土	青磁・瓶	111.8			灰白→青(窓口部)、黒子粒含む	淡青透明釉、織からな	ロクロ	良好	竈壇焼灰類?
第19回	212	南半	黒褐色土	陶器・大日輪	112	37	65	淡青、黒及び黒粒 青磁・窓口部	織からな	ロクロ、西内側り出し	良好	織口?
第19回	213	南半	黒褐色土	陶器・大日輪	112	37	65	淡青、黒及び黒粒 青磁・窓口部	織からな	ロクロ、西内側り出し	良好	織口?
第19回	214	南半	黒褐色土	白磁・瓶	164	22	65	内口・黑褐色含み灰 窓口	淡青透明釉	ロクロ、西内側り出し	良好	窓口?
第19回	215	南半	黒褐色土	陶器・青磁	110	(67)	20.4	窓口・(丁字)・白 灰子粒含む・気泡多・ 少子粒含む	淡青黄・淡青灰不透明釉	ロクロ	良好	窓口・丁字
第19回	216	南半	黒褐色土	瓦質土・瓶形?	21	13.6		燒土・砂粒含む	灰黑・内凹	ハサメ	良好	全体に擦付有
第19回	217	南半	黒褐色土	新丸瓦				口・砂粒含む	灰	良好	瓦質?	
第20回	218	P-1		土師器・环	112	68	28	燒土	淡青黄	ロクロ・内側・本切・斜 内側・内側ナマ	良好	
第20回	219	P-300		土師器・环	124	90	26	燒土	淡青黄	ロクロ・内側・本切・斜 内側・内側ナマ	良好	
第20回	220	P-29		土師器・环	123	80	24	燒土	淡青黄	ロクロ・内側・本切	良好	
第20回	221	P-37		土師器・环	125	83	26	燒土	燒	ロクロ・内側・本切	良好	
第20回	222	P-6		土師器・瓶	7.4	48	16	燒土	に赤い・黃褐	ロクロ・内側・本切・内 此ナマ	良好	
第20回	223		黒褐色土	土師器・环	122	80	31	燒土	淡青黄	ロクロ・内側・本切	良好	
第20回	224		ラベル無し	土師器・环	132	80	30	燒土	淡青黄	ロクロ・内側・本切・斜 内側・内側ナマ	良好	
第20回	225		ラベル無し	土師器・环	133	81	31	燒土	淡青黄	ロクロ・内側・本切・斜 内側・内側ナマ	良好	
第20回	226		ラベル無し	土師器・瓶	8.1	64	15	に赤い・黃褐	に赤い・黃褐	ロクロ・内側・本切・斜 内側・内側ナマ	良好	
第20回	227		ラベル無し	土師器・瓶	8.4	66	16	に赤い・黃褐	に赤い・黃褐	ロクロ・内側・本切・斜 内側・内側ナマ	良好	
第21回	228	北半	黒褐色土下層	石頭	240			體による割り	青白			
第21回	229		黒褐色土中	石頭	(226)	(11.6)	79	體による割り	青白・外側工具痕明顯に現 る			
第21回	230		上面検出時	破	残底 17	幅 7.6	高 1.7					
第21回	231		上面検出時	破	残底 49	幅 1.3						
第21回	232	南半	黒褐色土下層	砾石	11.0	幅 4.2	厚 4.0		淡青			
第21回	233	北半	黒褐色土下層	砾石	残底	幅 6.6	厚 4.8		純白・瘦		御省	
第21回	234	北半	黒褐色土下層	圓状石製品	英 9.2	幅 2.5	高 2.0		圓盤し・把手底上面堅 角(石頭加工痕)	滑行・石頭転用		
第21回	235	北半	黒褐色土下層	鉢	残底 61	幅 2.65	厚 1.8		圓盤	滑行・青白石鉢		
第21回	236	北半	黒褐色土下層	鉢	英 7.8	幅 3.4	厚 1.7	-一面に圓盤し(石頭の 加工痕)・他部位に削傷し て有り	一面に圓盤し(石頭の 加工痕)・長方形、 石頭転用	滑行・有滑石鉢・長方形、 石頭転用		
第21回	237		黒褐色土下層	鉢	英 6.7	幅 2.8	厚 1.5		圓盤	滑行・有滑石鉢・石頭転用		
第21回	238	S-10	石頭中	土製品・鉢	英 6	幅 3.1	厚 2.6	燒土・白磁子粒含む	明編・明細	手捏・轉土工捏合	良好	青白石頭
第21回	239	北半	黒褐色土下層	用途不明石製品	英 10.7	幅 2.6	厚 2.6		圓盤し・次元による凸 凹地紋三箇所	滑行・石頭転用		
第21回	240		一面検出時	骨製品	肉 3.3				淡青		直角?	
第21回	241	P-102		骨製品	肉 11.1	幅 1.50	厚 1.0		淡青		歎音	
第21回	242		黒褐色土下層	陶質人形	肉 7.2	幅 3.1			燒土		型成形	良好 塵二入を複数
第21回	243	P-32		土製品・鉢	英 5.5	径 1.8	孔 0.6	燒土・燒粘子・少量含 む	燒土	ナゾ	良好	曾伏土鉢
第21回	244	北半	黒褐色土下層	石鉢	英 4.9	幅 1.4	厚 1.4		灰白	相落し		
第21回	245	南半	黒褐色土	織口II	残底 10.5	幅 6.5	高 3.5	粗く大粒の砂粒含む (窓口部)	灰白(窓口部・淡青 窓口)	ナゾ	不良	先端接觸付着
第21回	246	S-12明田	8-3	織口II	残底 9.8	幅 7.6	高 3.3	粗く大粒の砂粒含む (窓口)	灰白(淡青・淡青 窓口)	ナゾ	不良	先端接觸付着
第21回	247	S-34		織口	残底 11.7 ~12	厚 5.0						織口?



1. 博多遺跡群第160次調査北半第3面 全景（南から）



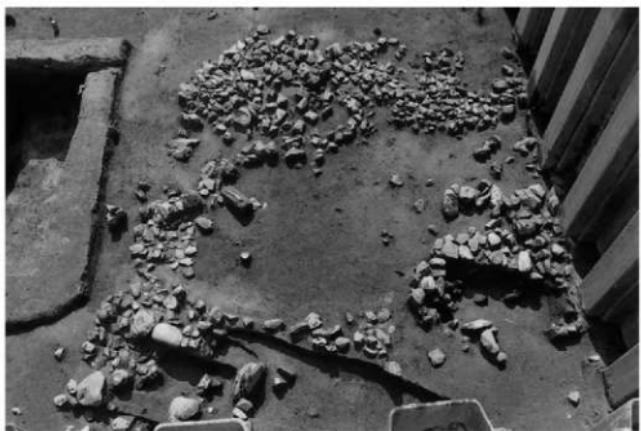
2. 博多遺跡群第160次調査北半砂丘面 全景（南から）



1. 博多遺跡群第160次調査南半第2面 全景（東から）

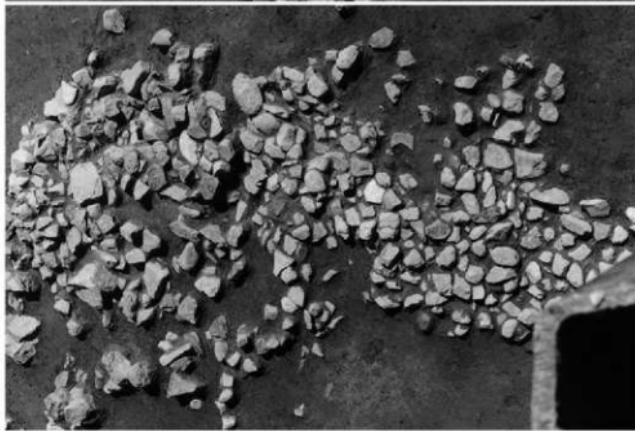


2. 博多遺跡群第160次調査南半最下層 全景（南から）





1. SX-3・7
(東から)



2. SX-6(西から)



3. SX-10(南から)



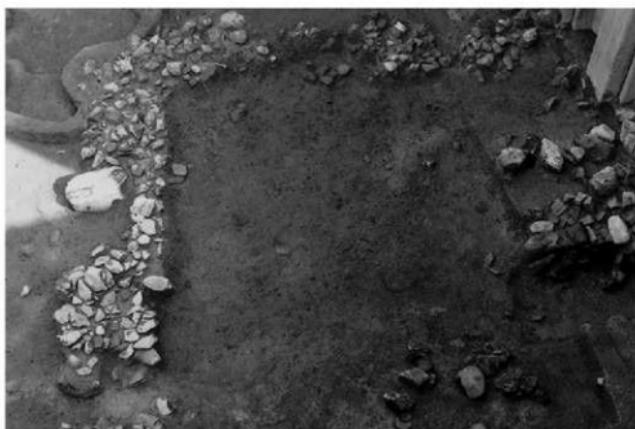
1. SX-2(北から)



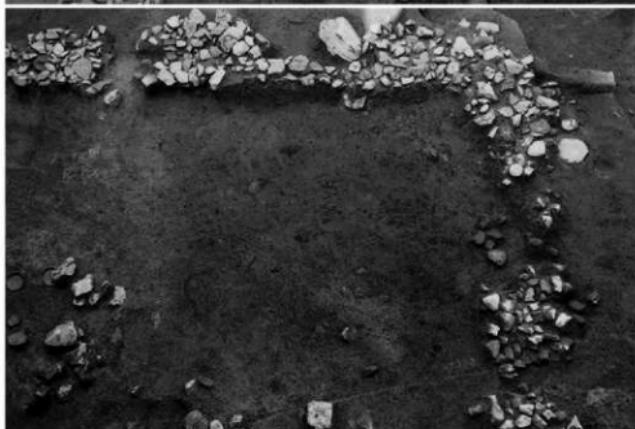
2. SK-12(北から)



3. SK-13(北から)



1. SX-14(北から)



2. SX-14(西から)



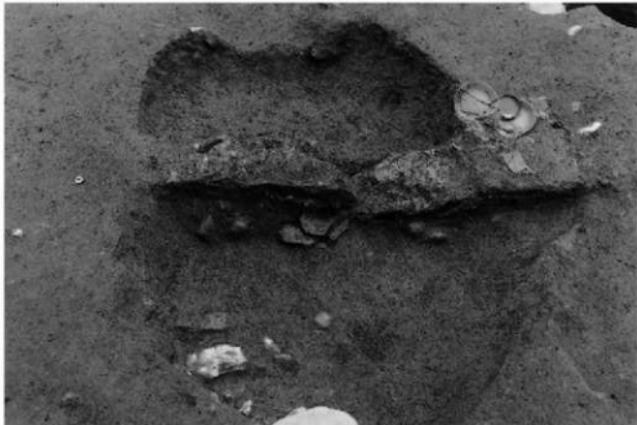
3. SX-14下溝(西から)



1. SX-10(西から)



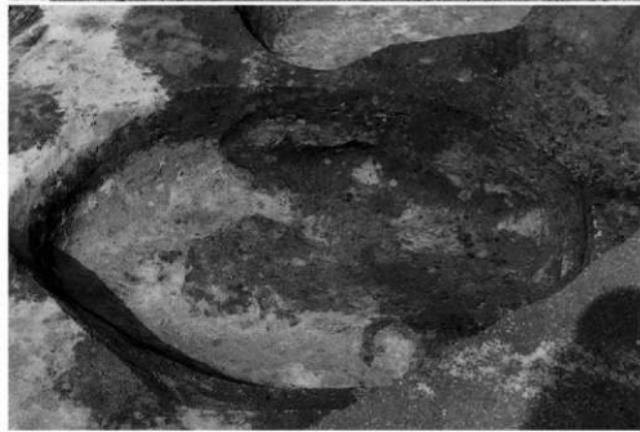
2. SX-16(北から)



3. SK-19ベルト(南から)



1. SK-20(北から)



2. SK-23(東から)



3. SK-24(西から)



1. SE-25・26(西から)



2. SK-27(西から)



3. SK-30(南東から)



1. SX-32・33(北東から)



2. SX-34(南西から)



3. 南半最下層石列
((西から))

報告書抄録

ふりがな	はかた						
書名	博多120 一博多遺跡群第160次調査報告—						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	990						
編著者名	赤坂亨						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	西暦2008年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	度数	度数		
はかた いせき ひん 博多遺跡群 第160次	福岡県福岡市 はかた く つまほく 博多区御塲町 144-145番	40130	0121	33° 35' 49"	130° 24' 24"	20060403 20060704	134.1 共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・主な遺物				特記事項
博多遺跡群 第160次	集落	中～近世	集落—中世～近世／溝2井戸2土坑13石敷遺構1 石組遺構2性格不明遺構8石列1ビット多数—土師 器+須恵器+陶磁器				
要約	博多遺跡群息浜の調査。博多浜との入り江に面した部分である。検討の結果、本調査地点は南側に向かって傾斜する砂丘の縁であり、この傾斜面につくられた最も古い遺構面の時期は13世紀であることが分かった。南半の石列を境に遺構自体がなくなることから、この時期の息浜と博多浜の入り江の汀線が本調査地点南半付近を通ることが想定される。遺物で最も古いものは最下層から出土した12世紀代の瓦器であるが、本調査地点ではその時代の遺構は検出されなかった。その後、14世紀以降には傾斜が黒色系砂質土によって埋められ、水平な土地になった。近世以降には土地利用がさらに盛んに行われたようである。						

博 多 120

—博多遺跡群第160次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第990集

2008年(平成20年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
(092)711-4667

印刷 有限会社交信社印刷所
福岡市博多区須崎町12番7号
(092)271-2692